

四部合戰狀本と平家打聞

高橋 貞一

四部合戰狀本に就いては、はやく山田孝雄博士の「平家物語考」に傳本の解説を施した後、流布本平家物語と比較して、記事内容の有無をあげて、「思ふにこの本は世にいふ平家物語を以て編年體に改作せんと試みたるものにあらざるか」と推定せられたが、「世にいふ平家物語」といふ語は明確でなく、研究者としては不正確な用語である。

その解説中に、「長門本に似たる點あり、さらぬ點あり、又流布本より多くなれる事項もあり」と述べてゐる點は參考にすべき重要な點であつた。

次に筆者も「平家物語諸本の研究」に於いて、四部合戰狀本に就いて少しく述べる所があつたが、未だ十分とは云へなかつた。近く渥美かをる博士が、「平家物語の基礎的研究」に於いて、醍醐雜抄所載の平家物語の作者、吉田資經を四部合戰狀本の著者にあてたのである。その結果は、この四部合戰狀本が古體の平家物語であるが如き觀を與

へる結果になつたのである。事實はこの醍醐雜抄にしろ、平家勘文錄にしろ、平家物語については確實な史料でないにもかかはらず、これを重要視する所に根本的誤謬が始つたものと思はれる。そして渥美博士は、「源平鬭諍錄とは性格を異にしている。この本には源平對等に扱う史譚軍談的志向は見られず、また作者について勝れた文才の閃きを認めることが出来ない。素朴で實直なこの本は、原平家の意圖するところを尊重し、それを史實に受け継ぎ、さらにそれを發展させようと努力している。灌頂卷を特立していることが如實にそれを物語つているといへよう」と述べ、特色ある寺院關係記事、靈驗譚、出家發心譚、牒狀等の増補をあげて、「素朴な詞章を持つた十二卷本というべく、屋代本と同類詞章もあれば、千手などのように初登場を思わせる簡単な詞章もあり、屋代本と比して記事の缺如も多い。従つて語り系十二卷本の祖本のような性格を持つのだが、同時に増補系としての祖本の性格もあり……中にも長門本と類似詞章を持つ場合が多く認められる」と推定して居られる。この十二卷本の祖本とか、増補本の祖本とかいふ語はあいまいで、必ずしも四部合戰狀本の成立を明らかにす

るものではなく、筆者の傍點を付した原平家の意圖するところを尊重するの語などは原平家そのものが想像的なものである以上、學的には何ら益するものではない。しかしこの渥美博士の推論が後の論考に多大の影響を與へたのは不思議である。それは後の研究者が四部合戰狀本を平家物語傳本上の位置を他の諸本に比して古態的な性格を持つと認めるに至つたことである。例へば、富倉徳次郎博士が、その「平家物語研究」に平家勘文録を基として古來存在した歴史的編著と認め、語りもの系十二卷よりも古い性格があると推定して居られる。渥美博士の説を繼承した如くである。次に山下宏明氏は、名古屋大學教養部

紀要第十一輯（四十二年三月）に、「平家物語四部合戰狀本に關する研究」に於いて、四部合戰狀本を讀み本系といふ見方を改め、編著系と呼び改めて、「より記録的で叙事性が濃く、治承壽永の亂に、より一層密着する形で、ために人物を描いてもこの時代にふさわしい形で、より寫實的に描く」と述べ、これに對して、「語り系の屋代本は、記録的にはくづれるが、作品としての構想化が進み、こうした構想に沿つた形で脚色が進み、事件や人物を描いても寫實的であるよりはより説話的である」と述べて居る。ここに屋代本と對比したのは、山下

氏が渥美博士と同じく屋代本を以て最も古い平家物語の詞章形態を保持するといふ見地からであらう。山下氏が記述の有無よりも内面的な觀點に立つて四部合戰狀本を見ようしたのは注目すべき點であらう。

次に東京教育大學文學部紀要、國文學漢文學論叢第十四輯所載、信太周氏の、「四部合戰狀本と原態の要素」もやはり、四部合戰狀本を古態の性格の平家物語と認めた論考である。然し果してこの四部合戰狀

本はこの様な性格を持ち、鎌倉時代に遡る程の著作であらうか。十分に吟味する必要がある。平家物語の詞章を比較する時、簡單なものがいつも古態であるといふ考へが支配的であり、一方に於て平家物語は語りによつて成長したといふ觀念が強固働いて、富倉博士の如き考察が行はれるのであるが、本文の十分な比較検討と、傳本の廣きにわたる考察が重要である。筆者の考察もこの點を十分に示すために詳細にわたつて例示するつもりである。

二

四部合戰狀本は四十二年三月、大安より慶應大學斯道文庫藏本が影印せられたので、引用はこの刊本によるが、研究者の便のために、假名交り文として引用し、筆者の讀み方を示すこととする。ヨコト點もあるが十分に讀みこなしてゐない點があるからである。卷二、卷四、卷八は缺卷であつたが、卷四は文學（四十一年十一月）に翻印された野村精一氏藏本によるものである。

さてこの四部合戰狀本は、山田孝雄博士の述べた如く、長門本と極めて密接な關係がある。従つて先づ長門本との前後關係を明らかにすべきである。從來の研究が怠つたのはこの點にある。結論から云へば、四部合戰狀本は長門本を基として、盛衰記、延慶本平家物語（現存本か同系本）、十二卷本（一方流及び八坂流本）を參照して文を作成し、又他の史料や記録をもつて増訂したものと認むべきで、内容上からは、文學的に脚色することは念頭になく、源平爭亂の記録として歴史的編年的に略叙しようとしたものの如く、その著作年代も南北朝初期

の成立と推定すべきである。

次に各巻に就いて論ずることにする。

巻一、巻頭に序として、祇園精舎より心も詞も及ばれずまでを一段低く書いてあるが、各巻ともにこの書き方を示すのは、適當ではない。各巻頭に序といふべきものがある筈がない。この序の中に、「舊主先皇の政にも随はず諫も謂はず、天下の亂れん事をも悟らずして」とあるのは、長門本、延慶本、盛衰記になく、覺一本などにある語である。「間近くは太政大臣清盛入道」は長門本に近い。平家先祖の條では、「寛仁二年五月十二日始めて平朝臣の姓を賜はり」とあるは、鍋島本（八坂流甲類）に一致し、平家勸文錄に従ふものと思はれ、盛衰記には寛平元年、長門本には寛平二年とあつて、後の訂正であらうか。

「常陸大丞國香と改む」も、長門本に同じ。「貞盛、維衡、政度、政衡、政盛六代」とあるのは、覺一方本等にはなく、長門本、盛衰記、延慶本に略同じである。次に、忠盛の明石よりの上洛を述べて、

ほのくくと月を明石のうら路ニハ浪ばかりこそ夜と見えしかも

といふ歌を載せてあるが、他の諸本は殿上閣討の後に述べる。これは編年的に改めたものであらうが、歌が他の諸本と異なる所がある。

殿上閣討の條、「禪定法皇叔感に堪へず」とか「雲の上人憤り猜み」とか、一語、一句に長門本などに類するものがあるが、全體からは十二巻本に近く、左兵衛尉家貞の、「狩衣の下に腹巻を着つつ、却つて立帽子を差し、髪福多引籠んで大刀を腋に挟んで殿上の小庭に候ければ」とあるのは、他の諸本と全く異なる所である。罪科の沙汰に及ばず

の次に、季仲卿の色黒くしてはやされた事や、花山院兼雅卿の事がある。これらは十二巻本や長門本は五節の沙汰の條に述べてある所で記述の順序が異なる。清盛官途昇進の條には、鱸の事がなく、八坂流本の性格である。清盛出家の條に、「仁安三年十一月十一日病に犯され、存命のために出家す。生年五十一歳」とあるが、長門本、覺一本も十一月で、屋代本のみが二月で公卿補任と一致する。禿髮の條、「時忠言はく、此一門にあらざる者は、男も女も法師も尼も人非人にありける也と。」この傍點を付した語は、長門本に同じ。「聞き出すに随つて毛を吹きて科を求む」も長門本に同じ。

我が身の榮花の條では、「四男、重衡、藏人頭、嫡孫維盛四位少將、舎弟頼盛、正二位、大納言、教盛、中納言」とあるが、十二巻本にはなく、長門本に同じく、「近衛大將を定められてより、武智麻呂内大臣、左大將、田村丸、大納言、右大將、それより以來兄弟左右に相並ぶこと」とある所も、長門本に類し、「齊衡元年八月廿八日、左大臣冬嗣」は、延慶本に類し、長門本は二十二日である。左右大將の事に就いては、他本よりもその年月を示して記録の増補がある。即ち次の如くである。

齊衡元年八月二十八日 冬嗣良房

同 三年九月二十三日 良相

天慶八年十一月二十五日 實頼師輔

○寛徳二年十月廿三日 頼通頼宗

○永暦元年八月十七日 基房

同 二年八月十九日 兼實

とある。公卿補任と合致せぬものもある。櫻町中納言成範の北方の條

に、

花の山たかき木ずへときゝしかどあまの子ともかふるめひろふかとは(なれや長)は八坂流諸本と長門本、延慶本に存する歌である。櫻町の條は十二卷本に近く、長門本とは甚しい差がある。この我身榮花の條は長門本等に比して簡略で、むしろ十二卷本に近い詞章である。祇王祇女の事はない。省略か。

二代後の條では、「右大臣公能公の御娘、大皇太后宮大宮に揚らせ給ひ」とあるのは長門本に同じく、「先帝の后宮にて、古目枯久幽なる御有様にて渡らせ御在す」も、古めかしうは長門本の語と一致する。「永曆應保の比」も同じである。次に、則天武后の事がある。唐の則天皇后が太宗、高宗の二代の皇后になる語である。長門本延慶本に同じであり、八坂流甲類本とも類する。長門本等の、「感業寺」を、成業寺と誤る。本文の引用は省略するが、刊本一七頁より一八頁に及ぶ。「久壽の秋の初、草葉の霧と消え」とか、「かかる憂き事を聞かざらまし、口惜しき事とぞ思食されける」も長門本に近似する。「家門の榮花や侍るべき」も同じ。

うきふしにしづみやはてん川竹の世にためしなき名をばながしてといふ歌は他の諸本とも異なる。これは前述の忠盛の歌と共に本書の歌の他本と異なるのは不可解である。「故さら色有る御衣を召されず、白き御衣十四五計りぞ召されける。内へ参らせ給ひければ、恩を承らせ給ひつゝ、麗景殿にぞ渡らせ給ひける」も、長門本等に近く、八坂流の大山寺本に類する所がある。賢聖障子の事なく、長門本延慶本に類し、「この間の御長居哀れに珍重しき御事共なり」は長門本延慶本とは

異なる語である。

額打論の條、「廿八日新院崩御成りぬ、取り敢へざりし御事なり。御年廿三、御位を去らせ給ひて後、僅に三十餘日也」は傍點を付した所は、八坂流甲類本に類し、又長門本延慶本に一致するが、傍線を付した所は他本にない語である。「同年八月七日香隆寺の良」とか、「南都は東大寺興福寺を始とし、未寺々々相伴ひ、東大寺は」とか、長門本延慶本に類し、「南都の末寺等次第に立並ぶ。興福寺に迎へて北京には延暦寺の額を立つ。其外山々寺々彼方此方立並べたり」は延慶本に類する。又百二十句本にも近似する。「山階寺の方より東門院の衆徒、西金堂衆、觀音房、勢至房兩三人、三枚甲を着、左右の蹀差いて、黒革鬼鍬に、大剣（やぎなた）用て走り出づ」とあるのも、延慶本に類する語である。

清水炎上の條に、「況んや人倫僧徒の法に於いてをや。斯る淺猿しき事出來り、式作法散々に、高きも賤きも四方へ退散す。或は蓮臺野の奥、船岳山の堀や溝に走り入り、喚き叫ぶ聲雲を分け地を響し實に震し」とあるのも長門本延慶本に類する。「貴賤騒ぎ々（のど）事名目ならず、内藏頭教盛朝臣布衣にて右衛門の陣に候はる」も長門本に類する。

清水法師不日に用意あり。老少を謂はず起り集り二手に分けて相待ちけり。一手は瀧尾の不動堂に陣を取り、一手は西門に陣を取れり。山門の大衆復二手に分けて寄せ、搦手は久々目路、靜閑寺、歌の中山まで責め來たり。大手は霸陵の觀音寺まで襲ひ來たる。或は坊舎に火を懸ければ、折節西風劇しくして、黒煙東へ吹き覆ひ、

猛火燃え懸りければ、清水法師一矢も射ず、取る物も取り敢へず四方に退散しければ、終に西門に吹き着け、三重の塔まで焼けにけり。何がしたりけむ、本堂一字ぞ残りける。無動寺法師に伯耆の豎者乗圓と云ふ學匠ありけるが、惡僧にて進み出でて申しけるは、罪業もとより所有なし、妄想顛倒より起る。心性源清ければ、衆生即ち佛なり。只本堂に火を差せやと申しければ、衆徒尤々として、手々に火を燈して、本堂に付けたりければ、即ち焼けぬ。一時の内に回祿す。淺猿しと云ふも愚なり。

この文は長門本、延慶本に殆ど一致し、十二年卷本の詞章とは全く異なる所である。「これなりとぞ返札を立てける。何なる嗚呼者あやなしの仕態しだい(なりけん)とをかしかりけり。今年は諒闇にて御禊大嘗會みそひもなし」も長門本と類する語である。次に東宮立の條も、「同年十二月廿五日」は長門本に一致し、「五歳にならせ給ふ。年來は打籠められてましましつるが、萬機の政今は法皇の聞し食せば憚無し」も長門本に類し、「同年十月七日高倉院東三條にて」は、長門本は二月七日である。本書の誤りか。「寛弘二年一條院は七歳にて御即位」も、寛和二年(盛覺一本)がよく、長門本(延)は寛仁二年とするも誤りである。「安元二年七月廿八日御年十三歳にて崩御なりき。」は六條天皇の崩御で、他本にない所である。

殿下乗合の條では、「此の入道の一類、國をも庄をも多くふたげたる事を目ざましく思ひて、此の人亡びたらば」も長門本に類する。しかし、

資盛(重盛次男)、其の比越前守にておはせしが、生年十二歳、若侍

十四五人を相具して、内野の遊びより返り給ひけるが、時の攝祿の臣(基房、忠通公の次男なり)松殿院の御所法住寺殿より、中御門東洞院の御宿所へ還御なりけるが、資盛六角京極にて参り合ひて、車より下り給はざりければ、暗き程にて太政入道の孫とも知らで、只人の無禮なるやと思ひ、御友の者共咎めつつ、何なるしれ者なればと云ひつつ打つ程に、車の物見を打破りなど散々に追ひ散したりけるを……。

とあるが、他の諸本に比して甚だ簡略である。又その描寫も資盛への亂暴に對しては興味を示さず、物見が打破られたとするのみである。本書の特異な性格を示すものであらう。誠に記録的な叙述に終つて文藝的な躍動は少しも示さない。

今夜も元服の定めは延びにけり。多田源三藏人、夜もすがら本鳥結び付けて、顯物者の狩衣かりぎぬをきて、殊に引刷ひ、御所に参りて申しけるは、殿下の御友して、本鳥を切られたりと云ふ風聞あり。某弓箭に携り、かりまたを逆にはぐと雖も、本鳥を切らるる程にては、人ためにて無く、命生きて人に面を合せてむや。所詮不肖の身を以て出仕をすればこそ憂き名を流せとて、出家して引籠りけるこそ、淺猿しと云ふも愚かなれ。

とあるのは、盛衰記卷三の文による所であらう。他本には見ない。

嘉應三年正月五日の主上元服、朝朝行幸がなく、「承安元年十二月十四日太政大臣第二女入内、法皇御猶子の儀なり。同廿八日女御となりき」とある。大將所望の一人師家について、「三位中將師家卿などや、御年の程未だ少く御在せども成り給はむと申しし程に」とあるの

も長門本に類し、「信讀の大般若半帙計に及んで、香良大明神の御前なる橘の木に鶺鴒が兩つ食ひ合ひて死にけり」も同じく長門本、盛衰記に類し、成親の賀茂社祈願の事の記述の順は盛衰記に同じく、雷火の事を先に述べ、

外法を行ひける程に、寶殿の後の二つの槌の木に雷落ち懸りて、火燃え付きて、若宮の社焼けにけり。非分の事を祈り白されけるに、神は非禮を受け給はねば、斯る事も出来にけり。加様の怪しきをも恐れず成親卿尙加茂社へ百日、日詣でをぞせられける。百日に満ずる夜……(歌を示さる)

とある。次に、「治承元年正月廿四日除目に、右大將重盛左に轉じ、……五條中納言邦綱卿大納言に補任す。年五十六、一の中納言なりけれども、第二にて中御門中納言宗家卿……正二位大納言に至れり。」とあるのも、長門本、延慶本に近い語である。次に、

東山鹿谷と云ふ所は、法勝寺の執行俊寛の領なり。件の所後は三井寺に連りて、よき城として彼の所に城郭を構へて支度しけり。とあるが、長門本延慶本に近く、

或日寄り合ひけるに、多田藏人行綱を招きて、弓袋にせよとて白布三十端をば取らす。酒宴あり。瓶子の^いびければ、北面の下藤平判官康頼取り敢へず、事既に成就して候。平氏倒れたり。首を取るには如かじとて、瓶子の頸を差し擧げたりければ、上下どよみてぞありける。

とある。十二卷本の諸本や長門本等に比して極めて簡略で、全く他の諸本の如き躍動した記述がない。單なる記録である。次の鵜川合戦

も、俊寛の父、木寺法師の事を述べた次に、徳大寺嚴島參詣を述べてゐるが、記述の順序は八坂流の丁類本に類し、長門本延慶本は鹿谷會合の前に述べる所である。文章亦簡略である。師高が、「安元二年十一月廿九日加賀守になりて」とあるが、延慶本に同じく、覺一本、長門本は安元元年十二月廿九日である。

湯河と云ふ所に出湯あり。目代彼の湯にて馬の湯洗ひを爲しける程に、大衆咎めて、伊豆房、淨智と云ふ者、馬の足を打折る。目代寄せて温泉寺の坊舎を焼き拂ふに依つて、神輿を捧げ奉りて上洛し山門に訴ふる間、大衆起りて國司師高を流罪せられ……。

とあるのも、又極めて簡略で、他本に比して全く記録的である。願立の條に、久安三年四月の山門の訴狀がある。これは長門本延慶本にのみ存し、これに對する院宣狀は、延慶本に類し、長門本とは甚しく異なる所がある。後二條關白薨去に就いては、長門本に類する語が多く、

和光利物の方便なれば折節咎めさせ給へば、而る可しとも覺えず。本より腫物の御病にて御在しけるが、尋常の死人にも似させ給はず、御看病して御後に居たりける人も、御前に候ひける人も、互に見えぬ程に高く大きにふくれさせ給ひければ、棺に入れ奉るべき様も無かりけり。時に父の大殿御涙に咽ばせ給ひつつ、御湯沐^{かけ}を召して、春日大明神の御方を伏拜ませ給ひて、設ひ山王の御科目にて師通世を早うし候とも、斯る有様にて恥を隱すべき様も候はず、定業限り候命を助けさせ給へと申させ給はばこそ、難き事にて候はめ、

此の後も氏人氏人たるべくは……。

とある所は長門本のみにある語である。

御輿振の條は、先づ内大臣師長の安元三年三月五日太政大臣任命を述べるが、長門本延慶本は、木寺法印寛雅の事の次に述べる所である。頼政の山門大衆を防ぐ條も簡略である。「深山木のその梢とも見えざりし」の歌の次に、「鳥羽院の御時五月の暗なるに鶴と云ふ怪鳥の御所の上に鳴きければ……」とあつて、鶯退治の事がある。長門本、屋代本に類する所である。又延喜帝の時の飢饉の事がある。これも長門本に類する。内裏炎上の條では、師高配流の宣旨があるが、これも長門本に類する所である。大極殿の焼亡に就いては、貞觀十八年四月九日、天喜五年二月廿一日、治暦四年八月二日焼亡、同十月十日上棟、延久四年十月十五日造出も又長門本と同じである。

以上の諸異同を以て推察するに、卷一は八坂流甲類本の如きものを基として、長門本、延慶本等を参照して編輯したものの如くで、長門本を底本として編すれば最初の數章がもつと詳細になつたと思はれる。

卷二は缺で、阿波國文庫本などは熱田本の卷二を以て補つてあるが、これは覺一本系統の眞字本である。

卷三は、卷頭に、院の拜禮、太政入道の用心の事を述べ、次に、後白河法皇の傳法灌頂の事がある。この記事の順序は、八坂流甲類本及び長門本卷五に類するものである。傳法灌頂の條に、「文治三年の比、天王寺に後智光院を建てられ……」とあるが、文治三年は他本にない語である。次に、

抑山門の騒動を閑められんとて、御灌頂は留めたれども、學生堂衆快からずして、山上閑ならずとぞ聞えし。山門に事出来ぬれば、世も閑ならず、又何事の有る可きかと怖し。此の事今年の春、義寛四郎越中の國へ下向する處に、釋迦堂の堂衆來乘房義寛の立つる所の神領を押へ取りて知行する間、義寛瞋りを成して、敦賀の津へ下り合ひて合戦に及ぶ處に……來乘房を助けんとす(長門本一五七頁上)とあるのは殆ど長門本と同一である。

次に建禮門院御惱については、

建禮門院その比中宮と申ししが、春の晚より御惱とて貢御も通乎く浪らず、御寝も打解けて成らずと聞えしかば、時の人々驚き怪みて、何事や御物の氣なんど騒ぎ合へり。時の後の宮にて御在しませば、雨が下の歎きたる上、平家の一門殊に歎き給ふ。大政入道も二位殿も肝心を迷し給ふも理りなり。是く申す程に只成らぬ御事とて引替へて喜び合へり。主上は今年十八に成らせ御在します。未だ王子も渡らせ給はず、若し王子にて御在しませば、いかに目出たからむとて、平家の人々只今御誕生有る可き様に喜びて有猿し事をぞし給ひける。平家の繁昌を見るに、定めて王子にてぞ御在しますらむと時の人々は申し合へり。

これは盛衰記卷九、中宮御懷妊事と殆ど同文である。次の宰相丹波少將を申し預る事も、盛衰記の記述を簡にしたものの如くである。その中に盛衰記になき中宮御惱の有様を漢李夫人の昭陽殿の病床にたとへた條があるが、この條は長門本の詞章に類し、「生靈死靈共に輕からず、怖ろしくぞ聞えける。斯りければ、丹波少將召し返さる可き

由沙汰有りけり。宰相聞き給ひて、喜しなど申すも愚なり。少將の北方は尙まこととも覚え給はず、伏し沈み給ひける。七月上旬にも成りければ、」とあるのも盛衰記に類する語である。次の俊寛足摺の條にも、「只一人残るを思ひけるに、思ひ遣る方もなし。此の嶋の者共の恵美酒三郎殿を祝ひ奉りて、岩殿と號する處有り。成経康賴は是を熊野山と名づけて常に參られけれども、僧都は思ひ沈みて參られず。其の故にや是く漏れけるこそ悲しけれ」も傍線を付した所は盛衰記にのみある記事である。俊寛足摺の條は、一方流本に近く、長門本、盛衰記とも異なる所である。次に、學生堂衆合戦の事がある。盛衰記は、この記事を傳法灌頂の次に述べて居り、長門本延慶本は本書と同じ場所に述べて居る。全般的には長門本を簡略にした構成詞章であるが延慶本と類する語もあり、又盛衰記に類する所もある。善光寺炎上の事は、長門本最も詳細で、盛衰記これにつき、延慶本が簡略である。本書も、延慶本に近く簡略である。中宮御産事の前に、

靈寺靈社も多く失せぬ。皇法末に臨める瑞相なりとぞ沙汰有りける。堂衆と申すは學匠の所從、足駄尻切を取りし童部の法師と成りたる中間共なり。借上げ、出學、稱物、寄せ物の沙汰して、徳付き、袈裟衣清氣にて行人とて、了に君名付きて近來よりは學匠を者ともせず、金剛壽院座主覺心大僧正治山より三塔に夏衆とて結番し、佛に花奉るとぞ聞えし。

とあるのも、一部は盛衰記卷九、山門堂塔事の語と一致する。中宮御産の條は、長門本、延慶本と類する所、異なる所が交りあつて複雑である。

平家一門は申すに及ばず、關白殿を始め奉り、公卿殿上人馳せ參る。(法皇は)西面の北門より入らせ給ふ。御驗者には房覺昌雲兩僧正、俊堯法印も祈られけり。豪珍實全兩僧都、其の上法皇も祈らせ給ひけり。内大臣は例の吉き事にも惡き事にも騒ぎ給はねば、少し日蘭けて子息達を引具して參り給ふ。のどかに見え(給ひ)ける。

とあるも、長門本と殆ど同文である。

王子受禪の後、内侍の佐に成り給ひて、佐の内侍と申しける。今日の目出たき事は、太上法皇の御加持、思はずなりし事は、大政入道のおきたる様、優しかりし事は、内大臣の有様、本意無かりし事は、大將の折節籠居、御出仕有らば、何に目出たかる可し。恠しかりし事は、甌を北の御壺に下して、人々騒ぎ合はれ、又執り上げて南へ落したりし事、をかしかりし事は、陰陽頭安倍時晴が石の紐を落し失ひ騒ぎ求めける氣色、かばかりの大事の中にて、公卿殿上人、凡て堂上堂下腹を切りて、をかしさに閑處へ逃げける人も有りけり。建禮門院内へ參らせ給ひし時、后に立せ御在し申しければ、

入道思はれけるは……。

前後は傍線を付した如く長門本に類するが、右の記事は大略盛衰記卷九の詞章と同一である。長門本延慶本にない詞章である。次に大塔建立の事は、盛衰記は卷十三、高倉上皇嚴島還御の後に述べ、延慶本も、新院嚴島御幸中に述べるが、長門本及び一方流本は中宮御産事の次に述べる所で、本書と記事の順序は同一である。

鳥羽院の御宇に、高野の大塔修理の爲に、安藝の國を料所に寄せられける間、渡邊の遠藤六郎頼方を雜掌にて、六箇年に修理し畢ん

ぬ。清盛高野參詣有りけるに、老僧一人出來れり。眉には霜を垂れ、額には波を疊みたり。鹿瀬杖の兩俣なるに、金を入れてつきつゝ、盛國を招きて守殿の見參に入れ（給ひてんや）と有れば、佐承りぬと申して宿所に入れ奉りて對面有り……。

右の傍線を付した所は、一方流本に類し、傍點を付した語は盛衰記に近く、盛國は長門本には貞能、延慶本は家貞とある。全般的には長門本が基であらうか。次に、

廻廊百廿間を造らる。彼の社の體たらく、晝は鹽干潟にて夜は御殿の下へ鹽差入りて、遙に面晴れて西月光を移し、夕べは鹽差入りて海深く入れり。社壇の後は山高うして、山の上より瀧落ちたり。枝井子葉の影を切拂つて、赤氣の玉垣社壇を圍む靈地なり。和光同塵利生種々なりと雖も、何なる因縁を以て此の御神は加様に海畔の鱗に縁を結び給ふ（らん）と思はれて哀れなり。然も後に嚴島の内侍に託して言はく、汝知れりや否や、一年弘法を以て云はせし事を、さてこそ彌弘法大師の化現と知られる。

とあるが、終の邊は長門本と内容が似るが、不備で、一方流本とも類する所がある。本書の特異な記述である。次に頼豪の條に、「頼豪が死靈顯はれければ、一乘院三室戸などと云ふ智證門人の貴き僧徒を召して御加持有りけれども叶はず、承暦元年八月六日に皇子御年四歳にて遂に失せ給ひにき。敦文親王是なり」は長門本に類し、「他念なく祈り申しければ、同年正月より中宮亦只成らぬ御事にて、同二年十月十九日に皇子御誕生有りけり。即ち堀河院是れなり」とあるが、他の諸本はすべて承暦三年七月九日である。日本紀略は、五年七月九日

である。本書の不正確な所である。次に、

同十五日に法皇御産所六波羅殿へ御幸成る。十二月二日宗盛卿大納言并びに大將の解狀を返し賜はる。去じ七月兩官を辭し申されけれども君も御憚り有りて、授け給はず、臣も恐れを成して望み申されず。實房兼雅は哀れと胸は動き給へども、詞にも出し給はず。今還補し給へば、さればと人々思ひ合へり。

とある所も盛衰記と同文と云へよう。延慶本にこの文のあるのは盛衰記の補入と認められる。次に、

同三年正月七日に式部大夫章經都へ召し返さる。此の二三年は播磨の國上津の賀茂と云ふ處にて月日を送りけり。彼の所は舅盛國が所領なりければ、世の常の流罪には似ざりけれども、都の戀しきは忘れざりければ、彼の所に靈驗の觀音の御在しけるに、常に参りて祈り申しける故にや、故ら去年の十二月の晦より參籠して他念無く祈請しける程に、六日の晩程に、觀音の御示現かと覺えて、

昨日まで岩間を落ちし山河の何しか叫く谷下水

と有りけり。夢覺めて後に、實に憑もしくて、彌至誠心なる所に、京より使用有りて實に上りけるとぞ聞えし。

とあるのは、他本に見えぬ所である。

小將成經都歸りの條は簡略で、

二月廿日に、備前の兒嶋と云ふ處に漕ぎ寄せ、故大納言の御所へ尋ね入りて見給へば、うたて氣なる卑屋なり。斯る所に且くも住み給ひけん事、後まで痛はしくて、涙も盡きせず、怪しの民の屋なりけれども、彼の驗と覺えて障子の有りけるに、判鞭蒲朽螢空飛去、諫

鼓苔深鳥不飛と書かれたり。康頼入道之を讀み、又六月廿三日信俊下向とも有りければ、源左衛門尉の参りけりと知り給ふ。」とあるのも記録的で、長門本等に比して文藝的な性格を殆ど有しない。

良且く有りて言ひけるは、萬里の波濤を渡り鬼界が嶋へ放たれ、一日片時も命存らふ可しと思はざりしに、遠き守と成り給ひけるやらん、露の命も三ヶ年の間消え遣らず、今都へ返り上り再び妻子を見る事は喜ばしけれども、ながらへて御在しまさんを見奉らばこそ、甲斐なき命有るも本意有らめ、是までは急がれつれども、是より先は行く定も有る可しとも覺えずなど生きたる人に物を云ふ様に細々と話し給へども、春風に副へたる松の音計りにて、返答も無し。歳去り歳來たれども……。

この文も長門本に近いものである。

二月廿六日宗盛大納言並びに大將を辭し申さる。今年は(三十)三年に成る間、重忌の慎しみとぞ聞えし。

これは、長門本になく、盛衰記、延慶本の文と同じである。延慶本卷二本に十二月二日の辭狀を返し賜はる事を後に續いて述べるが矛盾がある。三月十六日丹波少將の洲濱殿訪れの條は長門本に略近いが、簡略である。成經の母妻子との對面は、

平宰相は成經を待ち受け人知れず喜び給ふ。母上少き人々御し集り見奉り、喜し泣きども爲合はれけり。福原へ召し出されしにも劣らず。六條も北方も、尙まこととは覺えざり氣なり。六條は未だ黒かりし髪も白く成りて、北の方を見れば、疲せ衰へて歎き思ひ給ひけ

ん事淺からざりけりと見えたり。四歳に成り給ひし若君も老しく成りて髪も生ひ延びて結ぶ程に成りにけり。見忘れ奉らずや、近付きなつかし氣に思ひ給ふ。三つ計の少き人の北方の傍に御しければ……。

これは十二卷本(覺一本)の本文に近いと認められる。長門本、延慶本、盛衰記と異なる所がある。有王の條では、有王のみで、長門本等にある龜王の事はなく、詞章も簡略で、他の諸本とも異なる詞章と云ふべきである。

船より上がりて見れば、聞きしよりも理過ぎて人の住むべき處にもあらず、中々云ふも愚なり。斯る所に我が身も放たれぬれば、行へも知らず心の闇に浮歩れ迷ふ程に、日已に暮れ行けば、來し方も見えず、何路とも見えぬ漫々たる蒼海の程、知らぬ山に入りぬれば、山路に日暗るれば、樵歌牧笛の聲もせず、瀬戸に鳥返れども、竹煙松霧の色も無し。只此の嶋の習ひにて、火燃え雷の聲より外は、眼に遮り耳に滿つる物は無し。

傍線を付した語が長門本に類し、傍點のある語は延慶本に類するものである。俊寛死去の條も他本と異り簡略である。

八月十日比にも成りしかば、今は命限りと見えければ、童念佛勸めて、都へ御返り候はぬ口惜しきなどと、妄心努々御在しまさずして、只臨終正念にして極樂へ参らんと思食し候可しと云へば、僧都息の下にて、兩人召し返されしに漏れし後は、思ひ切つてこそ有れども尙有りき。而れども思ふ心今は無しと云ふに甲斐(なき)涙を流し給ふ。二三日こそ有りけれ、終に失せ給ふ。童葬送して骨を取り

て、都へ上る。其の身村上天皇七代の苗胤、今は孤島配流の一人の罪人なり。童骨を以て奈良の妃君に奉る。悲しなど云ふも中々愚なり。終に出家し雙林寺と云ふ所に籠りつゝ、父の後世を訪ひ給ふ。之を聞いて有王も同じく出家し、嵯峨なる所に籠りて主君の後生菩提を訪ひけり。

とあるのは、他本と異なる所がある。次に諸本にある辻風の事なく、本書の誤脱であらうか。重盛の逝去以下、熊野參詣、醫師問答、金渡は簡略である。無文、燈爐沙汰のないことも注目すべき事である。治承三年十一月七日の大地震及び安倍泰親占文の事は、長門本になく、盛衰記卷十一、延慶本卷二中にあるが、恐らく長門本の誤脱で、長門本卷七の巻頭に來るべきものであらう。本書は、

十一月七日戊戌大地震、震しく動いて、時尅移るまで在りければ、打返さんやと人肝心を失ひ騒ぎ合へり。同八日陰陽頭安倍泰親朝臣院參して奏聞しけるは、去ぬる夜の戌の時大地震しく動き、占文の差す所、名目ならず重く見え候。世は只今に失せ候ひなん。こは何に仕り候可き。以ての外に（火）急に見え候と、申しも了てずして、はら／＼と泣きければ、傳奏の人も淺猿く思ひ、御所にも騒ぎ思食されけれども、若き人々は差してやと思はれけり。怪からぬ泣き様や、何事か有る可きぞと咲ひ合ひける。泰親亦申しけるは、十三經の中の其の一つ、金貴經の説を見るに……。

とあるのは、盛衰記に基づくものと認められる。次に入道福原より入洛の事は長門本に近く、「七日戊戌大地震勢、八日泰親奏聞、十四日に攝録の臣松殿參内して」の傍線を付した所は、重複である。松殿の

上奏の事も簡略であるが、長門本に類し、法印問答の條は他の諸本は詳細であるが本書は簡略である。

法印を呼び返し對面し、法印の御房や、靜海が君を恨み奉るは僻事か。鳥羽院の御時、顯頼の民部卿逝去の間、八幡の御幸を留めて御遊も無し。忠貞の卿闕國の時、亦鳥羽院御歎き有りければ、忠貞傳へ承りて、老の涙を流し候き。臣下の失せぬるは、君の御歎きとこそ承り候へ。而れば唐の太宗は魏徵に後れて悲しみの餘りに夜泣き、昔の殷宗は良弼を夢の内に得たり。今の朕は賢人を（覺めての）後に失ふと、碑の文を自ら書いて廟に立てて悲しみ給ふとこそ承れ。又親よりも馴かしく子よりも喜ばしきは君と臣との中とこそ申せ。而るに重盛が中陰に八幡に御幸有りて御遊候ひき。外の聞えこそ面目も候はね。眞實に口惜しくこそ候へ。重盛は筆を取る臣にて候はざりしが、保元平治兩度の御大事を勤め進らせ候ひき。其の外勅命と申し、院宣と申し、度々惡黨を退け候ひし事、中々申すに及ばず候は、君も忘れさせ御在しまし候はじ物を。越前國を重盛に賜ひ候とて、子々孫々までこそと御約束候ひしに、死に了て候へば、召され候、何なる過怠か候はん。又二位の中將殿の中納言の中將を望み申させ候しかば、靜海三度まで執り申し候ひしかど、御許容無くて、關白殿の御子息三位中將殿を成し奉られ候ひき。彼と申し是と申し、面目を失ひ了て候へば、何計り口惜しく候（らむ）。是は君の御計らひにあらず取り申す人候と承り及ぶ。重盛が失せ候に靜海が運は顯れ候や、又存命して候はば、是程の事世も候はじ。老いて嫡子に後れけるは、朽木の枝無きにてこそ候へと泣く泣く腹立

てて申されければ法印これを聞いて……。

とある。太政大臣以下流罪の條は、

其の中、關白殿を太宰權輔に移し、筑紫へ流さる。斯る程には何か爲んと思食さる。御命も危く聞えければ兒河と云ふ所にて御出家有りけり。御年三十五。世の中盛りと思食されけるに、哀れなる御事なり。禮儀も吉く知し食して雲りなき鏡にて御在しければ、萬人惜しみ奉ること理りに過ぎたり。

とあるのは長門本に類すると云へよう。大臣流罪の例、師長流罪も簡略である。

平家斯る惡行を出さざらましかば、今此の瑞相を拜まんやと、且つは感じ且つは喜び給ふ。此の大臣去じ保元元年に中納言中將、御年廿にて、父惡左府の緣者にて土佐の國へ流され……(中略)是も先世の宿業にてこそ御在すらめ。

傍線を付した所は他本と順序が逆である。次に業房、光憲、遠業の事があるが、盛衰記卷十二の詞章に類する。次に基通内大臣關白事があり、

故中殿御子基通、二位の中將と申しける。一度に内大臣關白に成し奉る。大納言を経ずして二位の中將より(大臣)關白に成る事は、先例無し。是始めとぞ承るに、心あきれ迷ひて心肝も身に副はぬ體なり。昔堀河の關白殿從二位の中納言にて御在しけるが、一條攝政殿隠れ給ひければ、天祿二年十一月廿七日に大納言を経ずして、中納言より内大臣に成りて、内覽の宣旨を下されしこそ、珍しき事と人思ひしに、參議にあらずして大臣攝録はためしなき事なり。去々年

の夏成親卿父子、俊寛僧都、北面の下臈共が事に合ひ、君も淺猿く思食され、人もさこそ思ひしに、是は今一際之事なり。而れば是は何事の故ぞと不審なり。

傍線を付した所は長門本に類するが、その他は盛衰記卷十二の詞章に類する所である。行隆出仕の條は、

去(々)年の夏讃岐院の御追號、宇治の左府贈官の事有りしかども、怨靈も尙閑り給はず、最度怖しかりけり。是にも限らず入道尙腹を居ゑ兼ねて、残りの人々おちおちのきけり。故中山中納言顯時卿の長男、前左少辨行隆と申す人御しき。二條院の御代近く召し仕はれ、辨に成り給ひし時も、右少辨長方を超えて、左に加へられけり。五位正上し給ひしにも、顯要の人八人を超えてゆゆしかりしが、二條院に後れ奉りて時を失へりしかば、仁安元年四月六日官を留めて追籠られてより以來、永く前途を失ひて……。

傍線を付した所は長門本に類する所で、以後は盛衰記卷十三、長門本の詞章何れにも類する所である。「百疋百石を送られる上、今辨に成し返し奉る可しとありしかば、大方喜しなどは云ふ計りなし。手の舞ひ足の踏みども知らず、一門の中にも夢かと思ひける」とあるのも盛衰記に近いと云ふべきであらう。次に、「十七日右中辨親宗朝臣」は盛衰記に同じく、長門本は左少辨親宗とあり、

廿日院の御所、七條殿に軍兵雲霞の如く四面を打圍みて、二三萬騎も有るらむとぞ見えたる。こは何事ぞと御所中に侍ひあひ給ひける公卿殿上人、上下北面、女房達、さこそ淺猿く思しけめ。昔惡衛門の督が(三條殿を)したりし様に火を懸け人を焼き殺さんと云ふ者あ

りければ……。」

とあるのは長門本に類する詞章である。盛衰記もこれに近い詞章である。「佐衛門の佐と申すは法皇の御母儀、侍賢門院の御妹……」も長門本、盛衰記に類し、高倉上皇の御歎きの條に、

近く御す女房も心苦しく見奉る。世も加様に成り君もさ様に御在しまさん上は、是くて何とかす可きなれば、花山法皇の御在しけん様に、位をも去り出家して、山々寺々修行せばやと思食すと鳥羽殿へ申させ給へば、我が身には君のさて御在しますをこそ憑みにては候へ。さ様に思食し成りなん後は、何の憑みかは候べき。左も右も此の身の様を御覽じ了てさせ給へと細々申させ給ひたり。之を御覽じてはいとど御歎きの色深くして、御書を御顔に押當てて御涙に咽ばせ御在しますぞ哀れなりける。君は船なり、臣は水なり……。

とあるのは盛衰記の詞章に類する所である。六條院崩御、親範、俊憲等の歎きの條も、長門本、盛衰記と類する所である。

以上を以て推察するに、八坂流本を参照しながらも多く長門本盛衰記を以て取捨選擇し簡略化して編輯したものと認むべきであらう。

卷四は、野村精一氏藏の永正古寫本、文學（四十一年十一月號）に翻印せられたものによる。まづ卷頭に、

治承四年庚子正月元三の間も、鳥羽殿へは参り寄る人も無し。藤中納言成憲、左京大夫修憲兩人許り許されて候。年去り年來たれどもくつろぎ給ふ事も無し。閉ち籠められて御在すぞ悲しき。

同廿日には東宮御袴着、御魚味召すべきなど花色なる事（共）は世

間（騒ぎ）旬りけれども法皇は御耳の外に聞し食さるるもあはれ也。

とある。長門本卷七、延慶本第二中の記事と比較するに、治承四年正月元三の事の次に、成頼、親範等の歎きの事がなくて、此等の諸本と順序が異り、卷三に入るのは、十二卷本に基づくものであらうか。傍線を付した所は他の諸本に見えない語である。本書の特質の一端を示すものであらう。次に缺字が少しあるが、

二月十九日春宮位に即かせ給ふ。今年僅に三箇年（歳の誤り）、いつしかなりと人思へり。先帝指せる恙も御在せぬに、押下し奉らる。是も大政入道萬事思ふ様なるが至す所なり。平大納言時忠卿、いつしかなりと人傾け申すべき。異國には周成王三歳、周穆王二歳、各襪襟に包まれて衣冠を正しくせざりしに……。

と讀める。覺一本に比するに、辨内侍、備中内侍の事等がなくて、一方流本とは異り、「二月十九日」の語など、大山寺本に近く、大山寺本卷四には、

二月十九日春宮踐祚ありしかば、主上ことなる御つゝがもわたらせ給はぬをおしおろしたてまつる事、入道相國よろづ思ふさまなるがいたすところなり。主上ことし三歳にならせ給ふ。あはれいつしかなる讓位かなど時の人申あはれければ、平大納言時忠卿は……。

（以下一方流本に同じ）

とある。しかしこれも長門本に略同文と認められよう。辨内侍、備中内侍事等も長門本、延慶本にないのとよく類似する。嚴島御幸の條も、十九日西八條の邸を出發、供奉の公卿等の人名もあり、長門本に類するが、

西八條を出御あり。月もおぼろに霞みて、明け行く空の氣色を御覽するに、胡紫路を差して歸る鷹の妙々に音信るも哀れに、御友の公卿には帥の大納言隆季、五條大納言邦綱、藤大納言實國、前右大將宗盛、土御門宰相中將通親、殿上人には右中將隆房、右大辨兼光、宮内少輔宗範とぞ聞えし。

とある。傍線を付した所は盛衰記に類し、供奉の公卿の人名順序も盛衰記に類する。この點注目すべきことである。宗盛の嚴島御幸の隨行の條は長門本に類する。嚴島還御の記事の極めて簡略なことは、長門本、盛衰記、延慶本、大山寺本、平松家眞字本等に類してゐるが、これも四部合戰狀本の性格を見るに重要な箇所の一つである。その詞章は盛衰記と略同一である。

同廿六日には嚴島へ御參著、神主佐伯景弘、安藝國司と爲り、座主尊敎勸賞蒙る。四月一日新院嚴島より還御の次に、大政入道の福原の宿所へ入御なる。同八日亦勸賞の除目あり。左少將資盛從四位上、丹波守清邦は五位上なり。今日則ち福原を出御あり。寺江に付き御在す。同九日には御入京、御迎の公卿殿上人は鳥羽の草津へ參られけり。公卿には右宰相中將實盛一人、新王始めて大内へ御遷幸ありければ、公卿皆其へ參り、只一人とぞ聞えし。侍臣五人參る。嚴島まで參る人々は船津に留まりつゝ下りて京に入りしなり。

長門本と類する所も一部あるが、日時は盛衰記と全く同一である。

次に辻風の事がある。この辻風の事は覺一本などは卷三、重盛の醫師問答の前に出し、治承三年五月十二日とし、長門本、延慶本等は、同年六月十四日として重盛逝去前に出し、又治承四年二月廿九日、新

院嚴島御幸の前に重出してゐる。四部合戰狀本は、卷三にはなく、新帝御即位の前に、治承四年四月十日として載せてゐる。事實は四月廿九日である。詞章は覺一本のそれよりも方丈記に近く、全く同文である。新帝御即位の條も、盛衰記と略同文である。

左大臣の計ひ左右なき事なれば子細に及ばず。抑一院第二の御子以仁王と申すは……。

とあつて、御即位の記事の後に諸本は、重盛の子息達の籠居などがあるが四部合戰狀本にはなく、省略したものであらう。源氏揃の條、以仁王について、

位に即かせ給ふならば、末代の賢王とも謂ふべしと人申しけれども、此の世には天下の繼子にて御在しければ打籠められて、春は花に日を暮し、秋は月に夜を明し詩歌管絃に御心をなぐさめて過ぎさせ給ふ。斯かりし程に源三位入道賴政法師或夜祕に參り……。

とあるが、長門本にも類するが、盛衰記の方に近く、盛衰記の「春は花の下にて傾く日影を歎き暮し、秋は月の前にて明け行く空を怨み明し、詩歌管絃に御心を慰め、等閑に年月を過ぎさせ給ひけり」を省略したと認められる。この様な表現を眞名本であらはずことは容易でない。右の如く構文したものであらうが、美文は本書のよくする所ではなく、記録的にしか表現してゐない。この點四部合戰狀本の編者の才學、意圖を推定する根據とならう。賴政の語として、

平家は榮花身に餘り、惡行年久しく成り、只今亡びんとす。此の時いかなる御計ひもなくしては、いつの世にか期しさせ御在すべき。早く思食し立たせ給ふべし。愼しみ過ぎさせ給ふとも、終に安穩に

て御在しまさん事あり難し。君だにも左様に思食し立ち給へば、入道七十に餘り候へども、何とて御友仕らざるべき。

とあるが、これは長門本卷七の語と略同文である。盛衰記は詳細であるので長門本に従つたものか。源氏の姓名には脱字もあるが長門本、延慶本に近く、次に熊野湛増、颯の沙汰に就いては記事なく、

令旨を諸國に下さる。一院は成親成經の如く、遠國遠嶋へも放たれ給ふらんと思食され、西南離宮にて春も過ぎ夏も闌ければ、いかなるべきやと思食しける程に、大將頻りに取申され、入道思ひ直して、五月十四日鳥羽殿より例の八條鳥丸の御所へ出し奉り、軍兵御車の前後左右を打圍む。さる程に高倉宮御謀叛の御企てあり。流し奉るべき由聞ゆ。

とあつて、長門本などの大略を取りたるものの如く、信連の條は、信連は年來御宿直して朝夕候ければ、御友に參るべかりけるが、急ぎ出御ありければ、御所に見苦しき事共あらむ、後れ進らせて見廻らばやと思ひて留まりけるが、薄襖の一重狩衣の前後には□られたるを著つ、三尺五寸の太刀を腋に挟みつゝ差出で、騒がぬ鉢にて、光長に向ひ、此の程は是は御所にては候はず、早く歸參し、其の由を申すべしと云ひければ……(中略)

中垣を踊り越え、六角面へ出でつゝ東を差して行きけれども打留むる者も無し。

以上は全く延慶本の本文である。(原本卷第二中、刊本上、六九九頁―七〇二頁) 此處には信連の捕はれの事はない。高倉宮の三井寺入りの條に、

左太夫最度膝振ひ歩まれず。景行天皇第二の王子小雄王子(日本武尊是也)昔異國を平げに乙目の鉢をして賊主河上建を殺せしとなん。とあるのも、長門本、延慶本と同文である。次に競の事はなくて、三井寺より山門、南都への牒狀がある。牒狀の後の署名は、長門本、延慶本、盛衰記の間に若干の差がある。本書も又これらと差がある。興福寺の返牒中には、

就中貴寺者、我等本師彌勒慈尊常住精舍、何況或公家或姑射山……(中略)……僅加九卿無昇三公是五

といふ長文があるが、これは延慶本に無く、長門本、盛衰記にのみ存するものである。従つて長門本か盛衰記によつたものと見るべきであらう。牒狀の次に清盛が山門へ絹米を送る事があるが、覺一本などは南都返牒の前に述べるものである。長門本、延慶本、盛衰記は、本書と順序が同じである。

山門大衆心替りの由を聞き、三位入道是く讀みて札に書き同じ處に立つるなり。

薪とるしづがねりそのみじかきはいふ事やたらはざるらむ
主上は俄に大政入道の西八條へ行幸なる。新院は此の日来此の御所に御在しければ、日次方々惡しかりけれども、御沙汰にも及ばず、事の外の騒ぎとぞ聞えし。御車の前後軍兵共數千騎打圍みて候。

右の詞章は殆ど長門本と同一で、傍線を付した所が異なるのみである。歌が異なるのは、「山法師をりのべ衣うすくしてはちをばけふもかくさざりけりと」と共に、本書の特異な點で、他の諸異本と全く異なる所がある。

一如房の長僉議大衆揃の條も簡略ではあるが、大略長門本に類する語がある。孟嘗君の條は、

圓滿院大輔申しけるは、昔孟嘗君敵に襲はれて函谷關を通らんとするとき、鶏鳴かざれば關の戸開くべからず、敵は後に□近付きたり。何かすべきと云ふ處に、三千人の客の中に、鶏鳴と云ふ郎等、鶏の鳴く學まなをしけるが上手にて少しも違はざりければ、關路の鶏之を聞き皆鳴きぬ。關守之を聞き關の戸を開く。さて通りけると傳へ承る。而れば是は敵の計ごとにて侍るぞや。只寄せよと申しけれども、夜も明けければ……。

とある。かうした故事については本書は關心が薄く、他の諸本に比して最も簡略である。宮の三井寺落ちも簡略である。蟬折の笛については、

鳥羽院の御時、金千兩を唐帝に進らせられ、其の御返報と覺しくて、節に生身の蟬の付きたる様なる甘竹の笛竹を一節進らせられければ、御祕藏有りて、三井の僧正覺宗を召し、壇上に立てつゝ七日加持せられえらせ御在す御笛なり。おぼろげの御遊には取出されず。或時高松中納言實平卿賜はつて吹かれけるに、普通の様に思ひ……。

とある。長門本に基づくとすれば、傍線を付した語はなく、一方流本に基づくとすれば、傍點のある語に差異がある。橋合戰の條では、平家の軍勢の名前は長門本に類するが、

橋を引かれければ、橋桁を渡り戦ふ。一番には上總守忠清を大將軍とし五十餘人渡す。十七人射落され、残りは引退きぬ。二番には飛

驛守景家六十餘人渡す。廿三人射落され、是も残りは引退く。三番には信濃國の住人吉田八郎馬允常葉江三郎を大將軍として三十餘人渡す。廿餘人射落され、是も残りは引退く。江三郎は射落され、八郎馬允は左の眼を射られ引退く。四番には河内守康綱三十餘人渡す。九人を射させ引退く。五番には飛驒判官景高、上總太郎判官忠綱兩大將軍とし、□百餘人渡す。宮の御方には……。

とある條は、他本には見えない所である。大將軍と書く點は本書の注意の足りない條であらう。數十人の軍兵の引率に大將軍といふことは考へられない。又諸本にある一來法師の奮戰の事がないのは脱漏であらうか。忠綱先陣について、秩父足利の利根川合戰を引く條は、長門本に類し、賴政自害の後に、長谷部信連の奮戰がある。

三井寺法師三位入道も散々に成りぬ。一群も宮の御友には參らず、信連黒丸許り付き奉り落ち御在しける。信連は淺黄の直垂に大荒目の腹巻に左右の鞆こもを差しつゝ、三枚甲を著、繁籐の弓に高鷗羽の矢を負ひ、三尺五寸の太刀を帶きたり。三位入道の祕藏の馬油糟毛と云ふに乗りつゝ、宮をば先に立て進らせて……(中略)

二人御馬に昇き乗せ進らせんとすれども叶はず、而る程に敵迫付き奉る。落ち合はんとしけれども、寺法師律師靜房日胤、刑部房俊秀、

伊賀此等追付き進らせ、命を捨て劔を揮ひ隙も無く散々に戦ひ、律師靜房は飛驒判官に組み、大勢の中へ懸け入り討死しけり。伊賀房は落ちにけり。日胤法師兵衛佐の許より祈れと有りければ、八幡宮に

千日參籠して、無言の大般若を讀誦しけるが、六百日に當る夜、金の甲を御寶殿より賜はると御示現ありける。折節寺に事有りと聞

き、喜びて罷りければ、指したる事なかりける。宿願を満ててとて八幡へ落ちけり。凡そ怖しき者なり。

飛驒判官景高は、宮の御有様を見奉り、鞭を以てあれ〜と云ひければ、郎共落ち合ひ進らせて、宮の御首を昇き奉らんとしければ、信連弓を捨てつゝ、太刀を抜き、踊り舉りつゝ、景高が郎等の甲の鉢を健かに打つ……(中略)

さて宮の御首をば景高取りぬ。此の間に黒丸は走り失せにけり。奈良大衆三萬餘騎御迎に参り、先陣は木津河に著く。後陣は興福寺の南大門に在りと聞えければ、憑しき御事に思食され、今四五十町御在し付かで、射られさせ給ひぬ。正しき法皇の御子なり。位に即かせ御在し、世を知し食さるゝども、難かるべきか。それまでこそ御在さずとも、斯る御事有るべしや。先世の宿業と思ふぞ、淺猿しき。

三井寺法師、三位入道の家の子郎等大旨木津河より此方にて皆討たれ、亦落ちにけり。左大夫は……。

とある。これは延慶本卷第二中(刊本上、七七四頁―七七九頁)と略同文の所へ、傍線を付した如く、盛衰記の文(一部は長門本も同じ)を補入したと見るべきで、日胤の祈禱は長門本にもある。そして傍點を付した所は、長門本卷八(刊本二九一頁)と略同一の詞章である。これによると盛衰記や長門本を切り抜いて補入した如き構成である。以下宗信の事、高倉宮の女房の事も、略長門本に類するが、延慶本と類する語が混入してゐる所がまゝある。長門本は卷八の最後には脱漏があると認められるが、延慶本は通乗の沙汰や高倉宮の御子達の記事がある。本

書も、

同廿五日攝政殿より有官の別當忠成を南都へ遣はし、大衆の蜂起を制せられけれども、大衆散々に凌礫し、衣裝を剝き執り追返す……

(覺一本卷五、南都炎上に出る)。

五月廿八日には調伏の法を行ひ奉る僧共勸賞を蒙る。……(清宗位

階昇進)。(通乗の沙汰、高倉宮の御子達の事)

とある。三條院御子、輔仁親王の御事があるが、殆ど延慶本と同文である。

三宮はいか許り本意無く思食されけん、然れども仁和寺の花苑と云ふ處に住ませ御在しけり。法皇より、いかゞいつと無くさ様にては御在す、時々御出京なんども候へかしとて、庄園太多進らせられける御返事に、有花有獸山中友、無愁無歎世上情と申させ給ふ。凡そ詩歌管絃の道に勝れて御在すれば、世にも無く官にも御さぬ人々は、院内の御事より中々珍しく思ひ奉り参り通ふ人多ければ、時の人三宮には百太夫とぞ申しける……。

とあるのも延慶本(又は同系本)に據つた證左であらうか。頼政の鵜の事は、二條院の御時の事のみで、覺一本の如く近衛院の時の事は述べないが、連歌は、「ほとぎす名をも雲井にあぐるかな弓はり月のいるにまかせて」である。二回を一回にした書きぶりである。最後は、木の下ので、これも又略延慶本に近いものである。

以上によつて、この卷四は、長門本、盛衰記、延慶本(又は同系統本)を混じて、十二卷本も参照しつゝ、構成したと認むべきであらう。

卷五、卷頭の序に

治承四年庚子歲六月三日に大政入道年來通ひける福原の里へ行幸成りぬ。都遷りとぞ申しける。中宮一院新院攝政大臣、公卿殿上人皆参りけり。

とあるのも長門本、延慶本に近く、續いて、

三日と聞えし程に、是く引上げらるる間、供奉の上下最度あわて騒ぎ、取る物も取り敢へず、帝王の少く御在しますには、后こそ同輿にて御在しに、是は御乳母平大納言時忠卿の北の方帥の内侍と申すぞ参り給ふ。是は先例なき事なりとぞ人傾き申しける。同三日に池中納言頼盛の家を皇居として、主上渡らせ給ふ。同日頼盛家の賞を蒙りて、正二位し給ふ。右大臣の御子右大將良道も超えられ給ふ。

これも傍線を付した語は異なるが大略長門本と同文である。法皇の幽閉も又長門本に類する。次に都遷の先蹤であるが、他の諸異本の記事と比較して見るに、覺一本は、神武、景行、成務、仲哀、神功皇后、應神、仁德、履中、反正、允恭、雄略、繼體、宣化、孝德、齊明、天智、天武、持統、文武、元明、光仁、桓武の諸天皇である。八坂流の古き甲類本の百二十句本や屋代本は、これに對して、欽明、皇極の二天皇を添加したに過ぎない。長門本、盛衰記は、覺一本と少し異なる所があり、長門本には、景行、神功皇后、應神、雄略の諸天皇がなく、欽明、皇極が加はり、文武・元明の二天皇が又存在しない。盛衰記には成務、應神、雄略の三天皇がなく、長門本と同じく欽明、皇極の二天皇が加へられ、文武・元明の二天皇が存しない。然るに延慶本と四

部合戰狀本はすべての天皇を擧げてゐる。この點最も注目すべき所で、四部合戰狀本も延慶本も後の成立を示す重要な點ではあるまいか。然し延慶本と四部合戰狀本が詞章においても同一であるといふわけではない。

延慶本が各天皇の都の地を示し、何々の宮に住まれると述べられるのは、恐らく愚管抄によるものであらう。それは、崇神天皇の條に、「此御時君ノミツギ物ヲ奉備、諸國ニ池ヲ掘り船ヲ作り始ケリ」とあり、垂仁天皇の條に、「此御時始テ菓子ノ類ヲ被植、橘等是也」とあり、景行天皇の條に、「此御時始テ武内宿禰ヲ大臣ニ奉成、又國々ノ民ノ姓ヲ被定」とあるのを見ても明白である。四部合戰狀本は、宮の所在をすべて示さず、都遷の原因を述べてゐる點に特異性がある。例えば、孝明天皇の時には大石、河丸の謀叛、孝靈天皇の時には時成、左大臣の謀叛、孝元天皇の時は、宗尊、少將の謀叛、開化天皇の時は、作倫、右大臣の亂逆、崇神天皇の時は大山王子の謀叛、垂仁天皇の時は大石、河丸の亂逆、景行天皇の時は衣通姫の御物氣、成務天皇の時は武内大臣計畫、仲哀天皇の時は新羅征伐、神功皇后の時は大和歸國、應神天皇の時は平群朝臣の亂逆、仁德天皇の時は大伴大臣の謀叛、履中天皇の時は眞鳥大臣の謀叛、反正天皇の時は武内大臣の逝去、允恭天皇の時は橘成方の亂逆、安康天皇の時は古形の謀叛、宣化天皇の時は山田、左大臣の謀叛、孝德天皇の時は大炊、右大臣の亂逆、齊明天皇の時は石河、少納言の謀叛、天智天皇の時は豐成、左大臣の亂逆、天武天皇の時は大友王子の討伐、聖武天皇の時は廣繼の亂逆といふ様に述べて居るのである。桓武天皇の平安遷都や將軍塚の事は略長門本に近いが、次に、

此京をば平安城と云ふは、平に安しと讀みたり。而れば名詮字姓勝れたり。其の上東西南北往古の如來、法身の大神達、名を神明に借りて皇居を守護し奉り給ひて、德惠命に懸け人民を助け給ふ。天台の教法圓宗光り耀き、南都北嶺眞言花芳しく、佛法皇法共に榮え、東海西海の夷狄皆鎮まり、蘋蘩の禮備りて、人法同じく弘がて年序を累ね、星霜を隔てたる地を、我が妄念を翻して、我が心性の不調なるに依り、冥顯の知見を顧みず、人民の費煩ひを忘るる條、疎かにも尙愚なり。

とあるのは他本に見ない語である。以下は又長門本、延慶本に近く、都を凡人の身として輒く思ひ立たれるぞ多氣無けれ。御友に詣りける人、舊里の柱に書き付けけるとかや。

百年を四廻り迄に經て來にし愛宕の里は荒れやはてなん
開き出づる花の都を立ち出でて風福原の末は憑まじ

とある。歌の語句に他本と差がある。これも長門本に比して簡略である。新都の事始めも長門本に近い。次に、

廿一日園城寺圓惠法親王天王寺の別當を止められ、檢非違使を付けて惡僧共を迫めらる。僧綱十二人公請を止められ所領を沒收せられ、使廳の下部を付けて水火の責め有り。少將僧正房覺には飛驒判官景高、桂田院僧正實慶には上總大郎判官忠綱、宰相僧正公顯には出羽判官光長、常喜古院法印行乘には中判官章貞、美濃僧正覺智には攝津判官盛澄、眞如院法印能慶には後藤判官基弘、大法房僧都貞円には源大夫判官季貞、近江僧都遍智には澤大夫判官友實、越後律師觀忠には中志經弘、大藏卿法印行曉には秦府生兼康、常住院僧正

實印には但馬判官盛國なり。此の上尙藏人頭重衡行き向つて……
(三井寺炎上)

とある。傍線を付した語は、長門本、盛衰記、延慶本にも見えぬ語である。順序も三本と異り本書の特異な點がある。又記事の順序から云へば、長門本が本書と同一であつて、盛衰記は卷十六、福原遷都の前に述べ、延慶本は卷二末、富士川合戦の後に述べる所である。圓惠親王惡僧等の處置は治承四年六月二十日で、三井寺炎上は十二月十一日(百鍊抄卷第八)である。従つて三井寺炎上は延慶本の順序が正しく、圓惠法親王以下の處置を延慶本が三井寺炎上の次に述べるのは誤りである。長門本は、圓惠親王以下の處置は年時正しく、次に三井寺炎上を述べるのは誤りである。本書もこれに同じく、三井寺炎上の記事は長門本と大差がない。後徳大寺の月見の條は、

後徳大寺の左大將實定の卿新都に御しけるが、故京を戀ひつゝ、忍びて上り給ひけり。皇后皇太后宮大官計り残り留らせ給ひけるに、實定の卿參られて、待晩の小侍從を呼び出し、來し方行末の御物語して、深け行けば笛取り出し給ひて音取り澄しつゝ、今様を一つ歌ひ給ふ。(今様欠)、三返歌ひ給へば、大官を始め奉りて侍從以下の女房達皆感に堪へず御在し、袖を唾り給ひけるに、殊に侍從は心有りて色深しとて、高倉院故督殿を戀ひ在して、供御もつやゝ參らざりけるに、一首仕れと仰せ下されければ、

待晩の深け行く鐘の聲聞けばあかぬ別れの鳥は物かわと讀たりければ、節物を顯して、待晩の侍從とぞ召されける。御餘波を惜しみ出させ給ふとて……。

諸本とも異なる所があり、簡略である。次に物かはの藏人につきて、「美濃國なる家領を不日に賜はりける。今に(至るまで)子孫相傳する」とぞ承る」は他本にはない。物怪の條は、雅頼の青侍の夢は大略諸本と同じく、「赤衣を着たる衛府を六波羅へ遣す。良暫く有りて來たるを見れば、錦の細綾を懸けたる大刀一振、生絹の細綾を懸たる胡録一腰用つて参りたれば、則ち頼朝に預くとて、件の赤衣の俗、伊豆國へと下りけり。夢覺めて後……」は他本にない語である。清盛の使となつて青侍を召すのは、行隆朝臣である。盛衰記、延慶本も行隆、長門本は越中次郎兵衛である。青侍の夢を批判する者は、宰相入道俊憲とあるが、他の諸本は宰相入道成頼である。次に、

而る程に大政入道安藝の嚴島へ参り給ひ、大明神の御前にて御神樂を行はせ給ひけるに、十餘歳計なる小女に神付かせ給ひて、東國に兵革興つて、天下安穩なるまじと御託宣有りければ、入道大に驚き急ぎ上りて、筑前守貞能を召して此の事を言ひければ、東國にて宗との者は當時在京なり。上總介廣常計こそ召され候ひしかども、未だ参り候はず。彼を早々召さる可しと申されければ、尤も然る可しとて、相模國の住人大庭三郎景親が許へ廣常を急ぎ召し進らす可し。若し遅々に及ばば、子細を申すに及ばず誅して進らす可き由を仰せらる。彼の使未だ下り付かざる以前に八月十七日の夜、伊豆國の流人前兵衛の佐頼朝、同國の住人、和泉判官平の兼隆が山木の館に押寄せて……。

とある。嚴島の御託宣は他本になく、赤松俊秀博士が、日本歴史(四十四年十一月號)に保曆間記によるものと指摘せられて、四部合

戰狀本が保曆間記成立以後の著作であらうと推定せられたのは注目すべき點である。但し本書の成立は保曆間記成立以前と認むべき理由がある。次に頼朝の擧兵以下、石橋山合戦、衣笠合戦、駿河國大介兵部權守註進等があるが、長門本、盛衰記、延慶本に比して大差なく、入道の言として、

昔義朝は右衛門の督信頼に語はれ朝敵と成りしを誅罰して、其の子共一人も生けらるまじ(かりしを)宥め申すに依つて、頼朝流罪せらる。然るを忽に恩を忘れ我に向つて弓を引き矢を放つ。佛神も御免有る可き。三寶も加護し給ふ可きに非らず。只今天の責めを蒙る可き頼朝なり。怪しの禽獸だにも恩を報ゆるところ聞け。争か頼朝は七代まで我が子孫に向つて弓を引く可き。況んや正しく入道が世に於いてをやとぞ言ひける。

とあるのは、長門本(卷九刊本三〇九頁)と類する語である。延慶本も略同じ。朝敵揃も又長門本に類すると言へよう。咸陽宮の條も又略長門本に同じく(中に長門本と少しく異なる語もあるが)、文覺發心由來には、

抑兵佐頼朝は、清和天皇十代の後胤、左馬の頭義朝が三男、弓箭累代の家に生まれて、武勇三略の譽を施す。而れば東關の境に在りては、久しく柳營の士卒を隨へ、北關の月に交りては、終に羽林の上將に備りし。去んじ平治元年十二月、右衛門の督信頼卿謀叛の尅義朝彼の語ひにくみしけるに依て、子息頼朝永曆元年の比、伊豆國北條郡に流され、徒らに三十三年の齡を積み、頗る二十有餘の星霜を送れり。年來日來も而てこそ過しけるに、何にして(斯る謀叛を)思ひ企てけるやらんと人怪しみを成す。後に聞えけるは、年來の宿意

も而る事にて、高雄の文學が勧めとぞ聞えし。彼の文學は渡邊黨に遠藤將監持遠が子、在俗の時は遠藤武者盛遠とて、上西門院の衆なり。

とある。以上は延慶本卷第二末の卷頭の語と殆ど同一である。次に文學の道心の由來を述べるが、

去んじ永満元年春三月初比、父持遠渡邊の河に橋を懸けて、其の供養有りけり。折節、都七條西洞院に市佐と云ふ者有りけり。夫は死して後、後家をば世佐尼とぞ申しける。彼の娘に美女一人有り。鳥羽の秋山の刑部左衛門修乗が妻なり。彼の橋供養の時、初番に渡る者は、罪障を滅する由を聞きて、彼の女房一番に橋を渡る。持遠は淨衣にて渡る……(中略)。

同じく本鳥を切つて死骸に副へけり。二人共に出家して彼の女房を葬送しけり。骨をば二つに分けて、各々頸に懸け、山々寺々を修業しけるが、修乗は終に入唐して歸朝の後、大佛の大勸進の聖として、修乗上人とぞ申しける。盛遠は文學と名乗りつゝ、山々寺々を修行して……。

とある。他の諸本に見えぬ語で、文覺に對して大佛勸進の聖、俊乗坊重源をあげてゐるのは注目すべきことである。次に文覺荒業の事はなく、勸進帳の條は大略長門本に近く、勸進帳の文中、「惡業心に逞くして、三途の火坑に歸り」とあるが、「與造日夜、善苗又耳逆、廢于朝暮哉、再度」を脱した如くである。文覺の狼藉も長門本に近く、文覺流罪の條には、長門本になき清水觀音への書狀の事がある。延慶本にはある。福原院宣の條は、文覺の賴朝に對しての語に、

平家の世は末に成りたりと見ゆ。嫡子小松の内大臣こそ吉き人にて、計らひも賢く心も豪に御ししに失せ給ひぬ。前右大將宗盛は世を取り給ひけれども、亡者の若くにて天下の政務には及ばず、御邊には高運の相御在す。早く謀叛を起し、日本國の主とも成り給へ。天の與ふる幸ひを取らずは返つて其の身亡ぶと云ふ本文有り。此の時世を取り給はずは、何れの時をか期し給ふ可きと申すに、兵衛佐言ひけるは、去んじ永満元年の春より當國に住みて已に廿餘年に成りぬ。其の間は毎日法花經二部を讀みて、一部をば池の尼御前の御菩提に廻向し、一部をば自ら父母の孝養に廻向する外は他事無し。勸勤の者は日月の光にだにも中らずとこそ申し傳へたれ、争か此の身にてさ程の大事を思ひ立つ可きと返答しつゝ、南無八幡大菩薩、二所權現願はくは神力を與へ給ひて、多年の所望を遂げしめ給へ。且は亡父の素懷を果し、且は君の御憤りを息め奉らむと思ふ心深ければ、上總介弘常、三浦介義明以下の兵と契り、隙を窺ふ物をと思ひ給ひけれども文學には打解け給はず。

とある條は、長門本(刊本、三三二・三頁)、延慶本に類する所である。傍線を付した所は長門本になくして延慶本に類する。次に福原院宣文は、

頃年以來平家蔑如皇化、無憚政道、破滅佛法……院宣如斯、仍執達如件

治承四年七月六日

とあるが、これは長門本、延慶本所收のものとは異り、一方流本の院宣である。但し日付は覺一本は七月十四日、長門本等は七月六日であ

る。次に東國合戦(兼隆夜討、石橋合戦)の記事があるが、長門本、延慶本に比して簡略である。頼朝の安房國に落ちる條、所謂七騎落については、

後一條院の御時、高祖父頼義朝臣奥州の浮囚安部貞任等を迫められむと引退き給ひける時、大三の大夫光任、修理助景道、後藤内則明、藤原則季、清原貞弘、早河小太郎、已下七騎の事、既に舊例なりとて、七騎引具して安房の國へ落ち給ふと云ふ。然れば則ち渚より三段計漕ぎ出でける時、武藏國の住人八古宇の近藤七國平と云ふ者馳せ來たりて、何に國平をば船に乗せ給はずして出だされたと申しければ、七騎の吉例を守る事有るが故なり。安房の國へ付く可し。陸を繞りて急ぎ參れと仰せられければ、國平之を聞きて、年來の本意空からむ事口惜しと云ひて、自害せんとしければ、船を寄せて、誰をか下して國平を乗す可きと仰せければ、土肥次郎進み出でて、實平、大郎冠者遠平下させ給へ。其の故は此の遠平男は伊藤入道が聲にて候なり。……(中略)

遠平泣く泣く船より下りけり。實平是れも理りなり。若し我軍に負けたらむ時、子助けたらば後に憑まん斷りなり。余て國平を乗せられぬ。是くて東を差して行く程に……。

とあるのは、謠曲、七騎落以前の説話であらう。他本には見えない所である。州崎明神の御前の神樂の歌の次に、

次には十二三計なる女人に神着せ給ひて、心喜し氣にて、

六原はみもすそ河の流れぞや只關下せ浪の下まで

人々大に喜びて憑しかりけり。

とあるが、他本には見えない。次に角田河の浮橋の事や伴澤六郎成清白旗持參の事があるが簡略である。次に九月二十一日新院嚴島御幸がある。「御友には五條大納言邦綱、藤大納言實國、前右大將宗盛、源宰相中將通親、藏人頭重衡、安藝守有經、宮内少輔棟範」とあるが、盛衰記の卷二十三と類し、願文は、長門本、延慶本と異りて、盛衰記の願文に一致する。維盛關東下向の條は長門本に類し、大將軍の戰場に赴く時の三つの存知は長門本になく、覺一本等に類し、次に、

維盛朝臣は崩黄絲鬼の鎧、赤地の錦の直垂に、大頸端袖いろへたる紺地の錦にて、連錢葦毛の馬の太くたくましきに射懸地の黄伏輪の鞍置いたり。年廿一、みめ形人に勝れたり。繪に書くとも筆も及び難し。忠度の許へ志淺からざりける女房の許より小袖を遺すとて、

東路や草葉を分くる袖よりも絶えぬ袂に露ぞこぼる、

忠度之を見て則ち返事に、

別路を何か歎かん越えて行く關を昔の跡と思へば

とあるのも長門本に類する所である。次に、「十月十六日に新院安藝嚴島より還御成る。遙かの海的路なれども事の煩ひ無く、入御目出し」とあるが他本にはない。富士川合戦の條は、簡略であるが、

昔周の武王殷の紂王を罰せし時、空寒え雪降り積ること高さ一丈に餘りぬ。又門外に人來て兼ねて其の利を示せば、武王勝つ事を得たりき。又漢高祖は韓信が軍に圍まれ危かりし時、天俄に暗く成りて、高祖遁るる事を得たりき。故に鳥の羽音も定めて由緒有るらむと人恐れを成す。

は他の諸本に見えない所である。次の義經奥州より來會の事は、長門

本と略同文である。「十一月十一日五條大納言邦綱卿、内裏作り出して、主上渡らせ給ふ。彼の人は大富長者なる上、朝家の御大事なる人にて御しければ、程無く造り出されけり」とあるのは他本になし。次に遷幸の事を述べ、

同十五日に東國に赴し維盛以下追罰の使共今日は舊都へ返り入る。晝は人目を恥ぢて夜に隠れてぞ入りける。三萬餘騎を率して下りし時は、是程の大勢は聞きも見も及ばず、保元平治兩度の兵亂に、源平我も我もと有りしかども、之に合はすれば十分が一だにも及ばず。あな震し。誰かは是を迫め落し面を向ふ可き。只今に打撃かざるらんと見し程に、矢一つだにも射ずして、鳥の羽音に驚いて、敵の勢に臆して逃げ上りたる、無下にうたてしけれ。昔將門の討手の使に貞盛を下されたりけるには似ずや有りけん。在京の關東武士少々維盛朝臣に具して下りしも、小山田四郎朝政以下源氏に付きければ、彌勢重なりけり。一陣破れば殘黨全からじと爪弾きをぞしける。

とある。前半は長門本（刊本三七七頁）、延慶本と類するが、後半の傍點を付した所は、延慶本に類する所である。次に、落首として、餘りの惡さに奈良法師の中に、永覺阿闍梨と云ふ僧の歌を讀みて札に書いて立てたり。

（歌欠）

入道之を見給ひて踊り上り踊り上り腹立てて瞋りけれども叶はず。忠清は本名、忠景なり。乗つたりける鼠毛の馬に其の心を又歌に讀みて札に書いて大政入道の西の御門に立てたり（歌欠、忠景はにげの

駒にその歌か）。

亦入道之を見給ひて彌腹を居る兼ねて、齒喰みをして身を振ひ給へども叶はず。又後朝に尙歌を讀みて札に書いて立てたり。

（歌欠）。

とあるのは、他本と異なる所である。忠清の陳狀は長門本卷十一（刊本、三七八頁）、延慶本と略同じ。木曾生立ちの條は、長門本に類するが、少異がある。大嘗會五節沙汰も略長門本に類する。山門奏狀は、盛衰記、延慶本と類し、遷都の反對の理由として延慶本の十七箇條中、四、九、十、十四、十五、十六の六條を脱する。源平鬭諍錄も十四、十五、十六を脱するのは何か關係があるのであらうか。

遷都の條に、

之に依りて十一月廿一日に俄に歸都有る可しと聞えければ、高きも賤しきも手を合はせて喜び合へり。山門の訴訟は昔も今も、大小事共に空からざる事にて、止む事無ければ、何かなる非法非禮なれども、聖代の明時も必ず御裁許あり。何に況んや是程の道理をや。爭か入道も靡かれざる可き。之を聞き舊里に残り留つて獨孤を歎きける人人も喜びけり。

とあるのは長門本卷十一（刊本三八一頁）に類する語である。續いて、推古天皇の御宇、太子、憲法十七箇條を作りて、世の不調なる事を歎き給ひしかども、大方の誠しめ計りにて、當代の御煩ひにはあらず、文武天王の御時、不比等の大臣、律令を撰びて十卷の御書を作りて差置きしが、人僻まざりければ行はれざりき。其の後一百餘年を経て、淳和御門の御時にこそ、世の亂れ人直ならざりしかば、法

例を以て先と爲し世を治むるに、其の後四百年より以後、世は日を追つて衰へ、人は時に随つて僻みたり。平治の逆亂までは源平兩つの勇士……(中略)。

入道信西天下の引汲を守りて、米穀一粒を負せず、大極上下殿舎樓閣の修功を易く遂げけり。適大願を行ふ威儀、嚴重なること數箇度なり。皇居仙院の德例遂げられき。果して吉き事さのみ如何か點ずべき。都の遠近の煩ひ、貴賤上下の歎きと成るに依つて、十一月廿一日一院新院福原を出御ある也……(傍線を付した所は長門本に近し)。

とある條は他本にない所である。廿一日の歸都以後、希義の誅伐、伊豫河野等謀叛、近江源氏追討等も又長門本、延慶本に類する。南都炎上の條に、兼康の家子郎等の首を猿澤の池にかけた後に、

其れのみならず、清盛入道は平氏の糟糠なり。祖父政盛は大藏卿爲房の賀州知行の時檢非違使所の別當なり。又修理丈夫顯季卿播磨國々務の時、御厩の別當なり。父忠盛が殿上を免されしかば、萬人唇を返すと蘭城寺の返牒に書きたりけるも隠れなし。

とあるのは、盛衰記卷二十四の語と類する所である。南都伽藍の堂塔の名は諸本と一致せぬ所がある。次に、

日本我が朝は申すに及ばず、天竺震旦にも是程の法滅類ひ非らじとぞ覺えし。而れば天竺の娑羅樹國の弗娑蜜多羅一千一十宇の寺社を亡し、一千一鉢の佛を失ひけるも、是程には非らじ。間近く震旦の先跡を聞くに、弘法大師の歸朝の時三鉢を投げられし明州の津の宿善堂は宇實王に亡ぼされ、傳教大師の顯密二教を傳へ給ひし台州の海原の龍興寺は涼化大臣に亡ぼされ、白樂天の小野篁を待ち給ひて

造られし望海樓は、法坐天王之を亡ぼす。賀茂の保憲が早那起梨の天子に合ひ奉り、大仲臣經を習ひし劫夜殿は、州津王の爲に亡ぼされ、咸陽宮は項羽が爲に滅ぼさる。石季倫が金谷園は白太王之を亡ぼし、圓公角が里金清は利公王季理に滅ぼされ、季が皇居は越津が爲に亡ぼさる。四鵠が心を澄ましし商山の松の戸は管起王の爲に亡ぼさる。晋の七賢が濁れる世を恨みて閑ち籠りし竹林園は賢談王之を燒く。漢の明帝の白馬寺は漢の魏王の爲に亡ぼさる。唐の太宗の慈恩寺は魏の觀王の爲に亡ぼさる。什公番經が草堂寺は迷池大王の爲に亡ぼさる。結全和尚の青龍寺は公番大臣之を亡ぼす。道綽禪師の玄忠寺は烏婆羅王之爲に亡ぼさる。善導和尚の光明寺は明漢大臣の爲に亡ぼさる。懷盛法師が千福寺は公和天文王の爲に燒かれぬ。小康法師の烏陵山は密陀羅王之虎狩の時亡ぼさる。念佛根本の廬山は弗娑公が爲に亡ぼさる。禪窓幽閑の寒山は帝陀羅王之爲に亡ぼさる。達摩和尚の小林寺は筆點大臣之を燒く。道宣律徳の南山の道場は、君諦王の爲に亡ぼさる。是海雲を隔てて外にて聞きけるにや、今の滅亡程に非らじと思ひ准へられける。而れば貞慶上人が法滅の記と云ふ物を書かれける、其の詞こそ珍重しけれ。(八〇頁下段参照)

とある條は他本に見ない所である。貞慶上人は長門本卷十一には、「澄憲僧都の法滅の記と云ふものをかかれたりける、その詞こそめでたかりしか」とある。最後は重衡の歸京の事で終つてゐる。

以上を以て推察するに、一方流本の文を示すものは、福原院宣の文で、他は長門本が最も多く類似し、盛衰記、延慶本とも類する所も少なく、且つ本書のみの特異なる記事も一二に留まらない。従つて本書

は以上の諸本を参照しつつ構成したものと認めざるを得ない。殊にその誤脱は長門本を以つて訂正される所が甚だ多いのである。

卷六、卷頭に、

養和元年辛丑正月一日新年歳立ち返り、内裏には東國の兵革南都の火災の事に依り、朝拜を留められ、節會計り行はれけれ……（中略）佛法も皇法も共に盡きぬる事ぞ悲しき。新院御所も世の亂を思食し歎かせ給ふ上、御惱重らせ御在しければ、何事の御沙汰にも及ばず、一院の御有様申すも愚かなり。御心中に思食し連ねけるは、我十善の餘薫に依り、萬乗の寶位を忝なく思へば四代の帝王は子なり孫なり、何ぞ萬機の政務を留められ、數年の愁歎を送ること、心憂しと思食めされける。

とある。傍線を付した所は長門本に近く、傍點の條は長門本等になく、十二卷本に近い所である。又新院御所も……の所は、他本にない所である。これによるも、長門本にのみよつて構文したとは考へられない所がある。次に、新院崩御の條に御齋會の事のないのは脱漏であらう。次に、

邦綱卿の女房、別當殿、一位殿、次に、近く召し仕はれし人より始め三人出家し、暮の煙に類ひて春の霞に上らせ給ひぬ。其の後高倉院とぞ申しける。澄憲法師山より下り、靜閑寺に煙の立つのを、見奉り、何人を葬送するぞと問へば、新院崩御の間彼の御煙と申しければ、あな糸惜しやこは何かせん、常に見し君が御幸を今日よりは販らぬ旅と聞くぞ悲しき

と思ひ連けけるとかや。御年僅か廿一に成らせ給ふ。

とある。これは前半は長門本等に近く、後半の傍點を付した所は、一方流本に近い文である。又續いて、

法皇の御歎き理にも過ぎたり。恩愛の道なれば、何れの御子も疎ならぬ御事なれども、此の御事は故女院の御腹に在しまし、一つ御所に朝夕御馴れ見有り。御位に付かせ給ひては副ひ奉られ、互ひに御志深かりけり。去々年の冬鳥羽殿に渡らせ給ひし事、名目ならず歎き思食し給ひしより御病付かせ給ひ、東大寺興福寺焼けぬと聞食し、御心地重く成らせ給ふとぞ承る。

とある。これは他本にない所で、本書のみの異文である。紅葉の事は簡略である。葵前の條にては、

又建禮門院入内の比、安元の始の事なり。中宮の御方の女房の局に、青生癪野と云ふ女童あり。其の中癪野は忍びつゝ参りければ人も免して賞されける程に……。

とあり、癪野に就いては盛衰記に、宿彌とあつて、盛衰記に近い内容である。次に方違の行幸の事は、

又去んじ永長元年十二月御所へ御方違ひ成る行幸有り。而らぬだに鶏人曉を唱ふる聲明王の眠りを驚す程に成りければ、何も御寢ざめ勝ちにて、皇業の艱難を兎角思し連け給ひ、寒ゆる霜夜の天氣殊に劇しかりしかば、延喜の聖主四海の民何に寒かる（らんとて）御衣を脱せ給ひける事、げにもと思食し出して、我が帝徳の至らぬ事を歎き……（中略）

上日の者に仰せて主の女房の局へ送られけるとかや。又是のみなら

ず、此の君近習の女房侍臣に内々仰せられけるは、率土皆是皇民なり、遠き民何ぞ疎からん、近き民何ぞ親しからん、遠近共に仁を施さんと思食されけれども、一人の耳を以て四海の事を聞かず、黃帝は四聽四目の臣に任せ、舜帝は八元八愷の臣に委すと云々。而れども遠き(事は)さのみ奏する人も無ければ、思ひ知らずと思食さるるこそ御本意ならね、各々聞き及ぶ事有らば、穴賢、告げ知らせ奉れよと仰せらる。御恵みの事多かりき。

とあるのは、長門本、延慶本に近い文である。盛衰記も略同じ。續いて、

而れども諫鼓蘿深く、通乎々々鳥だも驚かず、何事に付けても人惜しみ奉らずと(いふこと)無し。天下諒闇に成り雲の上人も花の袂を衰し、何しか墨染の袖に成りぬ。興福寺の別當永圓は伽藍の破滅の煙を以て病倍り近く失せぬ。現にも心有る人の堪へ長らへ得べき世にあらず。

とある。十二卷本とは記述の順序が異り、又永圓の事も簡略である。長門本、延慶本には小督の事の次に教縁として述べてある。小督の事がないのは文學的表現が眞名本には困難なためであらうか。

次に、後白河法皇の御歎き、入道の娘を法皇へ参らす事がある。これも長門本、延慶本に近い文である。安元二年正月二十七日とあるのは、盛衰記延慶本と一致する。長門本は二十四日である。次に東國飛脚を述べるが、木曾義仲の記事のないのは脱漏であらう。續いて、同廿八日東國の源氏尾張國まで責め上る由、國の目代早馬を立てて申したりければ、亥の時計り六波羅邊騒ぎ合へり。都へ既に打入り

たる様に物運び隠し、馬に鞍置き腹帶しめなんどしければ、京中騒動し、こは何に爲んと迷ひ合へり。武士共人家へ走り入り目に見ゆる物を取りければ、一人も穩便ならず。

長門本、延慶本と略同文であるが、長門本に食物とあるのが、盛衰記に目に見ゆる物とあり、これは盛衰記によりてこの條を訂正したものであらう。次の二月七日の家々の供養、同九日の武藏權守義基法師の首入洛の事も、長門本に近い文である。本書に、

嘉承三年正月廿九日源義親の首を渡されける例とぞ聞えし。とあるが、長門本に、

康和二年七月十八日、堀河天皇崩御同三年正月廿九日、對島守源義親が首を渡されし例とぞ聞えし。

を略したものであらう。盛衰記は正しく嘉承二年七月十九日とある。續いて、

同十二日征東の大將軍左兵衛督知盛所勞有りて引き返す。左少將清經朝臣同じく入洛す。其の外の人々は美濃の國に留まり給ふとぞ聞えし。討手の使は度々下りけれども、是く歸り上りければ、東國も北國も勢日に隨ひて付き倍る。淺猿しき事なりとて、前右大將宗盛、我下らんと言へば、勇々しく侍りなんと上下式代して我もくと打立ちける。又國々の兵をも召し集められ、軍には公卿も殿上人も、弓箭に携る輩、皆打立つ可べしと聞えける。

これは盛衰記にのみある文である。恐らく盛衰記によつて構文したものであらう。正月十三日の宇佐大官司の脚力の事は長門本、延慶本に近い。次の十六日、十七日の記事は盛衰記によるものであらうか。

同十六日近江美濃兩國の凶賊の首共七條河原にて檢非違使之を請取り、東西の獄門の木に懸く。同十七日天下の政法皇本の如く聞食す可き由を前右大將取り申されければ、世務に口入すればこそ心憂き事も有り、由無しとて聞食し入れず。

長門本も十六日の記述は略同文であるが、十七日の條は、盛衰記に最も近い。續いて十九日の記事は、

同十九日越後國に城の太郎資長と云ふ者有り。餘吳將軍維用が後胤、奥山太郎孝家が孫、鬼九郎資國が子、國中肩を並ぶる者無く、威勢重くして境の外まで背かざりけり。又陸奥國の内、奥六郡に藤原秀衡と云ふ者有り。武藏守秀行が末葉なり。此等兩人に仰せて、頼朝義仲を追討す可き由宣旨を申し下さる。仍つて資長多勢を振ひ信濃の國へ超え、義仲を追討せんとする前日の夜半計り、空中聲有り、大佛殿を燒き太政入道の方人と（いふ）者有りやと呼ばはり、不思議と思ふ程に、俄に中風して二月廿五日に死す。

秀衡は九郎義經安元年中春の比打憑みて下りしに、十餘ケ年が間養育し、去年の冬兵衛佐の許に送りき。而るを多年の由見を空しくし今敵對し難き由を存じ、領狀申さず。

とある。盛衰記卷二十六は、

同十九日に東國北國の賊衆、頼朝義仲與力同心の凶黨征伐すべきの由、宣旨を以て、越後國の住人、餘吾將軍が末業、城太郎平資永と陸奥國の住人、藤原秀衡と、此兩人が許へ下し遣はされけりとあり（陽明文庫本）。

とあり、傍線を付した所は盛衰記にはなく、長門本、延慶本に近い。

但し記述の順序は維盛東國下向の次に述べてゐる。これは長門本延慶本が二月十九日としてゐるのを、盛衰記が正月十九日としてゐるによつて、詞章を改めないで、記述の順序を正月十九日に改めたものと推定すべきであらう。次に、伊與國河野介通清の事、その子通信の事を述べるが、これも盛衰記と略同文である。長門本、延慶本は詳細であるが盛衰記は簡略であり、本書も又簡略である。二十七日宗盛東國へ下向をせんとして入道の病氣によりて中止し、清盛の病狀を述べて、六波羅邊騒ぎ合へり。様々の御祈共始まると聞えしかば、あ仕つる事よ、さ見つる事よと、高きも、賤しきも鈔き合ふ。病ひ著き給ひし日よりして白き水をだも喉へ入れられず、身の内熱きこと火を以て燒くが如し。伏し給へる二三間が所へ入る者は、熱さ堪へ難し。而れば近寄る者希なり。言ひ給ふ事とは、阿多々々と計りなり。少しも只事とは見えず。二位殿より始め給ひ、君達親き人々も、何に爲す可きとも覺えず、あきれてぞ御し合ひける。馬車鎧甲弓箭大刀小刀金銀絹布の類取出し、神社佛寺へ奉りけれども、次第に重く成りて驗無し。然る可き定業とぞ見えける。

これも長門本、延慶本に近い文である。次の入道死去の條は、入道の遺言も、長門本よりはやや簡略であるが、近似する所が多い。

同七日六波羅にて燒き奉り、骨は圓實法眼頸に懸けて下りつつ、福原へ納む。余るに西八條の女房の夢に、太政入道の門前に新しき車勇々し氣にて、軀は人にして牛馬の面を爲たる者七八人門前に立ち、入道殿の御迎に参り候とて、車を差し寄するを見れば、車の内に火燃え、中に先と云ふ文字一つ書きたる札を立て、こは何事ぞと

思ふ程に夢覺めて後に人に語りければ……。

とある條は、長門本、盛衰記及び十二卷本とも異なる所がある。又維人の酒興にて騒ぐ事は、簡略である。次の八條殿の焼失は長門本に近い所がある。次に大庭景親の献上の馬の尾に鼠が巣くふ事がある。これは十二卷本などは、卷五、月見の章の次にある記事である。長門本、延慶本、盛衰記は此處に述べる所で、

天智天皇元年壬戌四月鼠馬の尾に子を生む事、日本紀に注すと承る。

とある。この日本紀といふ語は盛衰記(二方流本卷五)にある語である。

經の嶋の事、慈惠大師化現の事は極めて簡略である。祇園女御の事もやや簡略である。この祇園女御事の中に、

雲井より忠盛來たる月影に朧氣成りて人に知られな

の歌がある。長門本、延慶本、盛衰記に類する所である。維盛東國下向の事は、

同十五日頭中將重衡、權亮少將維盛、數百騎の軍兵を相具し、東國へ發向す。彼の兵共美濃國に集會して、其の勢六千餘騎、父入道失せ給ひて、今日十二日にこそなるに、さこそ遺言ならめ、佛經供養の沙汰にも及ばず、合戦の場に赴かれけるも、怪しからず覺えける。

とあり、これも又長門本、延慶本に最も近い所である。數百は長門本に數萬、六千は長門本に一萬とある。次には前述の如く、長門本、延慶本は十九日として、城太郎資長の事を述べてゐる。次に邦綱卿の死去を述べる。八幡御幸の事、山蔭中納言、如無僧都の事のあるのは、

長門本、延慶本も略同一であるが、次の記述はなく、本書に、邦綱卿亦治承四年福原にて五節あり。殿上宴醉の日、有雲客后宮へ推參せられ、竹湘浦に斑なりと云ふ朗詠を仕出しければ……(中略)

又貴賤を云はず親疎を分かず、人の大事を必ず訪はる。而れば人より勝れて、何事も一所の御領家の事を計り申されける。目出たき事にてぞ有りある。爾れば殿下殊に召し仕はれけり。中宮亮に成り給ふ程、法性寺殿薨じ給ひし後は、藏人の頭に成り給ふ上、公卿に至り正二位大納言に昇り給ふ。其れも佛神の御計らひとぞ覺えける。邦綱の母、賀茂大明神に志を運び参り給ひ……(中略)、

邦綱鞍馬を信じ月詣をせられ、參詣の間、原野の宿所の炎上有るを見つつ、少しも騒ぐ氣色も無く参られける。志の至り、多門天も何に哀れと思食されけん。昔粟田大臣在衡鞍馬へ月詣して官途の事を祈り申されしに、有夜の夢想に、黄色の紙に右大臣從二位に成し給ふと見て、夢覺めて傍を見るに實なり。喜ふこと云ふ計り無し……。

とある。娥皇女嬰の事は、盛衰記、一方流本にあるによつたものであらうか。傍線を付した條は盛衰記に略一致し、傍點を付した處、母の賀茂大明神への參詣の條は盛衰記、一方流本にもあるが、鞍馬詣の事は他の諸本にはなく、在衡の鞍馬の夢想は古事談卷五の説話と關連があるであらうか。

續いて二月二十五日法皇の法住寺殿御幸がある。これも長門本、延慶本と略同文である。次に三月十一日洲俣合戦がある。極めて簡略である。次に四月二十八日賴朝追討の院宣がある。長門本、延慶本は、二月八日に載せ、盛衰記は四月二十八日に載せてゐる。本書は恐らく盛

衰記の日時によつて改めたものであらう。續いて、

是隆義の父佐竹の三郎昌義、去年の冬、頼朝が爲に誅せらるる間、定めて宿意深かるらんとて、此の由を存じ、平家彼の國の國守に隆義を白し任ず。茲に因つて合戦を致すと雖も、只物學まなぶなれば、散々に蹴散らされ、奥州へ逃げ籠り畢んぬ。去年小松の内大臣薨ぜられぬ。今年又入道相國失せられぬ。

とあるのは、長門本、延慶本のみに見える文である。續いて養和元年五月に至る飢饉を述べて、

去んじ治承年中より世間飢渴し、此の五月に亘り、人種殘る可しとも見えず、築地の傍道の邊り餓死者數を知らず、車馬の行き通ふ道も無し。目も當てられず、死に伏す事を悲しみ仁和寺の隆曉法印と云ふ上人、上人を大多語らひつつ……(中略)崇徳院の御宇長承の比斯る爲師有りけるとぞ承る。

とあるのは、他の平家諸本になく、方丈記によつたものである。續いて横田河原合戦の事があるが、

六月廿五日越後國より早馬を以て申す。

として通信として述べることは本書のみである。その中に、井上九郎の勇略を述べるが全般が極めて簡略である。長門本、延慶本、盛衰記すべて詳細である。十二卷本は横田河原合戦の日時を一年後の壽永元年の事とするが誤りである。

次に、七月十四日改元養和、八月三日貞能鎮西下向、八月十六日通盛、教經北國下向、九月九日越前國合戦、九月二十一日行盛忠度越前發向、兵庫御所、定隆頓死、日吉五壇法、覺讃寢死、大嘗會延引、同

二十九日中宮院號、十二月五日皇嘉門院崩御、十三日院御所移徙と續くがすべて皆簡略である。長門本、延慶本と近似する所もあるが、異なる所もある。定隆頓死は、長門本、延慶本は覺讃寢死の次に述べる所であり、中宮院號は、長門本、延慶本、盛衰記にも此處には述べない。中宮院號建禮門院は、十一月二十五日(玉葉、吉記、明月記)である。二十九日は誤である。

以上卷六を概観するに、長門本、延慶本に近似する所が多いけれども、盛衰記と類する語もあり、十二卷本の影響も認むべきであり、本書獨自の構成が認められる。依つて特異な卷とすべきであらう。

卷七は、卷頭に序として、

壽永元年壬寅正月一日諒闇に依りて節會無し。十六日踏歌節會も無し。當代の御忌月に爲るに依り永く之を留めらる可しと。

ある。十二卷本にはなく、續いて、

二月廿三日夜半太伯昴星を犯す。是(重)變なり。天文要錄に云く、太伯犯昴星、大將軍失國境、又云く、太伯犯昴星、四夷來有兵起事と云々。

とあるのは、長門本と略同文である。延慶本には踏歌の來歴があり、盛衰記にも又ある。これは延慶本が盛衰記を参照して加へた如く認められる所があるので、本書は長門本によつたと認められよう。次の四月十四日顯真の法華轉讀も長門本と近似し、長門本によると認むべきであらう。續いて四月十五日重衡日吉社發向には、

北面の輩の中、黄水をつく者も有りけり。衆徒聲を擧げて喚き叫

び、集震して名目ならず、法皇急ぎ還御成りぬ。重衡卿穴尾邊にて迎へ取り返り進らせけり。大衆院を取り進らせんと云ふ事も無く、平家大衆を追罰せんと云ふ事も無し。何れも何れも跡方無く、實無し。何なる者の云ひ出しけむ、返す返す怪からぬ不思議にてぞ有ける。

とあつて、傍線を付した所は、長門本、延慶本にない所である。無實は延慶本にある。續いて五月廿一日廿一社奉幣使があるが、盛衰記にはなく、長門本に近似し、廿一日壽永改元は、長門本になく、延慶本には、廿七日改元としてゐる。次に九月四日宗盛大納言還補以下を述べてゐる。略長門本に近いが、

大納言の上藤五人を超えらる。就中左大將實定は一の大納言にて、才覺も人に勝れ花族も家を傳へ給ひしに、大將の時と云ひ、今度二ケ度まで超え奉られ給ふこそ糸惜しけれ。

とあつて、傍線を付した如く、盛衰記と一部類する所もある。次に、十一月廿日大嘗會遂げ行はれ、今年も晩れ、又同二年正月一日節會以下常の如し。廿六日宗盛卿從一位に任ぜらる。

とある。長門本と近似するが、宗盛從一位の事は長門本、延慶本は三月二十六日としてゐる。續いて二月廿二日朝覲行幸がある。長門本は二月二日、延慶本は二月一日、盛衰記は二月二十日とする。長門本、延慶本に近似する。次の同二十三日八條殿御拜禮の條は、長門本、延慶本、盛衰記みな正月三日の事とする。長門本に類するが、その中に、

内々攝政殿に仰せ合せられければ、攝政殿然る可き由申させ給ふ。

とあるのは、長門本にはなく、盛衰記、延慶本と一致する語である。次に同廿七日宗盛の内大臣辭退がある。續いて、

然れども世尙閑まらず、南都北京の大衆四國九國の住人熊野……公家の御計らひに隨ふ者一人もなし。

とある條は、長門本等は、前年の宗盛内大臣慶申の條に述べてゐる。次に頼朝義仲不快の事があるが、始めに、長門本、延慶本は、「去比より」とあり、盛衰記には、「三月の頃より」とありて、本書の「三月の比」とあるに類する。記事は簡略であつて、長門本、延慶本、盛衰記と大に異なる。十二卷本と異なる所は、

是れ差しも無き事なり。木曾平家に同意して東國を責むべき由、武田五郎信光の讒言とぞ聞えし。

とあり、長門本と類する語である。次に四月十七日平家北國下向がある。大略長門本に近いが、多少の異同がある。火打城合戦の事は、簡略であるが、その中に、

波西日を沈め紅にして齋淪なり、彼の大唐國に在る混明池の如し。輒く渡るべき様なし。十萬餘騎の勢迎ひの山に宿し……。

とあり、傍線を付した所は、長門本にない語である。五月十一日、越中前司盛俊と今井四郎兼平と越中境での合戦は他本にない所である。經正の竹生嶋參詣のないことは注目すべきである。次に義仲の布陣の事がある。續いて、

六月一日平家の大手既に土浪山を超え、同十一日資盛追捕使と爲し、節刀を賜はりて發遣し、黒坂柳原へ打出づるとぞ聞えし。

とある條は他の諸本に見えない。次の木曾八幡願書の條に、

是は何なる社と申すぞ。又何なる神をや祝ひ奉ると問はれければ、
是は故八幡大郎義家朝臣を崇め奉り給ふ。始め當國今八幡宮と…。
とあるのは誤がある。願文の次に、

此の願書と十三の上矢を忍びやかに大菩薩の社壇へ奉る處に、憑し
き哉八幡大菩薩、眞實の志や照し給ひけん、靈鳩天より飛び來たり
白幡の上に翺翹す。木曾馬よりこぼ落ちて甲を脱ぎ弓を平め、首
を地に付け涙を流し拜しける。平家の先陣遙に之を遠見して身の毛
彌立つてぞ覺えける。而る程に木曾の軍兵先づ三千餘騎にて馳せ來
る。敵に勢のかさを見えば惡しかりなんとて、松中柳原の山景に引
隱し、度計り有りては五千餘騎、度計り有りては一萬餘騎、三萬餘
騎の勢五六度にぞ馳せ付く。

とあり、これも明らかに長門本に類する詞章である。延慶本は少しく
異り盛衰記は大いに異なる所がある。俱利迦羅落の條は、長門本に比し
て簡略である。これは前々の戦争記述と同じく本書が戦争の詳細な記
述を避けて大要を述べようとした意圖と認むべきであらうか。

大旨谷へ落ちてぞ失せにける。大將參河守知度、讃岐守經時、刑部
大輔度盛以下、侍には飛騨判官景高、高橋判官長綱、武藏三郎左衛
門尉有國以下、靱負尉兵衛尉、諸司、檢非違使、有官の輩百六十
人、宗との者共二千餘人俱梨伽羅の谷にて失せにけり。

傍線を付した所は長門本になく、一部は延慶本には存する。次に、
平家隨分鬼と憑まれける妹尾大郎兼康も、木曾の郎等、庫満の六郎
成澄に生執られ、齊明威儀師も(生)取らる。維盛通盛は幸に天命有
りて□封の矢崎を遁れ希有にしてぞ助り給ふ。

とある。これは長門本にはなく、延慶本には次の志保合戦の條に出
し、十二巻にも同じ所に見える所である。續いて、

同日鹽坂軍は十郎藏人行家を盛俊勝に乗つて迫めければ、木曾土
浪山の軍に勝ちて四萬餘騎則ち鹽坂へ馳せ渡る程、安多賀の泊りを
渡るに、深さ淺さを知らざりければ、馬一疋追ひ入る。鞍爪ひたる
程成りければ、少しも引かず、今井樋口根井海野望月を始めとして
打入れく渡しければ、不日に鹽坂を追ひ落し、篠原の浪松にぞ追
懸けける。

とある。これは長門本に比して甚しく簡略である。延慶本に近い所が
ある。高橋判官長綱討死の事なし。續いて齊藤別當眞守討死の事を述
べる。これも長門本と異なる所があり、朱買臣の事はなく、最後に、

爾者眞守も討たれ、伊藤九郎、大庭五郎、眞下四郎、難波三郎も此
彼にて討たれ、今度の合戦に究竟の侍大旨討たれぬ。凡そ土浪山鹽
坂より始め、雲津松垣、金崎、浪松、鹽越、色濱、安高松原、竹
宿、所々の戦ひに皆討ち落されぬ。然る可き人々も皆馬を離れ物具
を捨て、或は東山道に懸り或は北陸道に臨み、思ひ思ひ心々に都へ
こそ上りけれ。去る四月十萬餘騎にて下りしに、今六月上るは三萬
餘騎、都合七萬餘騎は北陸道にて討たれぬ。

とあるのは、長門本にはなく、延慶本に類する詞章である。次に雲南
瀧水の事があるが、長門本、延慶本に比して簡略である。次の(六月)
五日の北國賊徒の評定の事、十一日(延曆寺藥師經讀誦の事はなく)大神
宮行幸事、玄昉の事は長門本に類し、木曾山門牒狀の事には、覺明の
經歷を述べず、木曾牒狀の本文は長門本に比して脱字があるが、盛衰

記や十二卷本所收の本文とは甚しく異なるものである。次に、大衆此の狀を披見して、僉義區々なり。或は平家の方なり或は源氏の方なり、心々に異義様々なれども、所詮我等金輪聖王、天長地久を祈り奉る。平家も亦當代の御外戚爲り、山門に於て歸敬を致され、今に至るまで深く彼の繁昌を祈りき。然れども頃年より以後、惡行過分の間、四夷の亂れ起り萬民之に背く。討手を諸國に分つと雖も、返つて異賊の爲に(追)落されぬ……。

とある。これは長門本、延慶本に略同文である。山門の返牒も長門本に類する所である。次に、

平家はを知らず、興福園城は憤りを含む折節なれば語らふとも叶ひ難し。山門は當家の爲に強ちに怨無し。當家も亦山門の爲に不忠無き上、今禦ぎ戦ふ力已に盡きぬ。而れば佛神加護に非らざれば争か叛逆の企てを平らぐ可きとて、七月十七日平家山上にて七佛藥師の供養有りとぞ聞えし。

とあり、次に兵亂の御祈の爲に、布施として三千衆徒各々に米一袋、白布一段を獻ずる由があるが、長門本延慶本にはなく、これは十二卷本の卷四の平家の布施と類する所がある。本書の特異な所の一つである。續いて平家願書の本文は、延慶本に類する。平家の連署の次に、又近江國佐々木庄領家預所分等、且つは朝家安穩の爲に且つは故入道の菩提を助けん爲に千僧の供料物として寄進せしむる所、件の庄を以て早く知行せしむべき物なり、恐々謹言。

とある。これは長門本、延慶本と類するが詞章は異なる所がある。續いて、

抑大衆を語らふ事、桓武天王の御宇、延暦三年十月傳教大師當山に攀ち上り。鎮護國家の道場を開きしより以來、佛法盛りにして……(中略)頃年のふるまひ神慮にも應はず、人望にも背きければ、祈る所にも堪へず語らふ所も益無し。

とあるのは、略長門本、延慶本に近い所である。次に、貞能上洛の條、

同十八日肥後守貞能鎮西より上洛、去年西國の輩謀叛の企有りて、筑紫へ下り、菊地原田等の黨類を相具して返り参る。其の勢九百餘騎、之を見て、喜び來たる者二百餘騎の中に、前の薩摩守親賴薄襖生絹、魚綾の直垂に赤鬼著て白筆毛なる馬に乗りて、貞能の屋形口に打たり。故頭刑部卿憲方の孫、相模守賴憲の子、勸修寺の嫡子なり……。

とあり、長門本、延慶本に類する所である。次に三位中將維盛の都落の條にも、北方の歎きに對して、

三位中將仰せられけるは、十六と申しし年見初め奉り、今年は十一年に成りぬとこそ覺ゆれ、殊に先世の契りや深かりけん、志淺からず、火の中へも入り水の底へも沈み、限り有る別れ道にも後れ先立たじとこそ思ひつれ、責めての悲しみの餘りにこそ、立ち離れ奉る歎きに打副へ心苦しけれと泣き給へば、若君姫君左右に御在し、女房共も前後に並み居て皆袂を唾る。此の北方と申すは故中御門新大納言成親卿の御娘なり。若君十、姫君八つとぞ聞えし、我をば貞能五代と名づけしかば、是を六代と云はんとて、若君を六代御前、姫君を夜叉御前と申す。

とある。これも長門本、延慶本を簡略した如き詞章である。

次に京中騒動の事がある。これは、

七月二日源氏の先陣既に近江國に付き人を通さずと風聞する程に、
廿日の夜半計六波羅邊大に騒ぎ、京中も亦靜ならず……。

とあるが、長門本には、

七月十三日曉より何といふ事は聞き分かねども、六波羅の邊大に騒ぐ。京中又靜ならず……。

とあり、以下兩書は同文で、本書は長門本に近似する所である。延慶本は維盛北方別離の前にこの事がある。次に、二十四日宗盛が建禮門院に参りて西國行幸を示すが簡略である。二十五日橘内左衛門尉季康が法皇の御不在を發見する。この條も長門本に近い所がある。次に平家都落を述べて、

或は陛下誕生の靈跡、又龍樓幼稚の青宮、博陸輔佐の居所、相府丞相の舊臺、三台槐門、九棘鶯鶯の栖、門前繁昌の地、堂上榮花の砌り（長、延、盛略同文）、申し連らぬるも愚かなり。夢にだにも未だ斯る事を見ずとぞ時の人々は申しけり。住み馴れし都を迷ひ出で何くと計りなく旅立ちけん各の心の内こそ悲しけれ。花の下の子の半日の客散る別れを惜しみ、月の前の一夜の友傾く曉悲しきぞかし、況んや年來日來馴れ成染みし夫婦の中、朝夕見るも飽き足らず、親子の別れ後會何つと期せざれば、何計り悲しかりけん推し量るべし。無常の春の花風に隨ひて散り、有待の暮の月雲に伴ひて隠る……多年の經營一時に魔滅しぬ。

とある。傍線を付した所は本書のみの語である。他は長門本、延慶本

盛衰記とも類する所である。次に、忠度の都落を述べる。長門本、延慶本と記事の順序が異なるが、詞章には類する所がある。

薩摩守忠度は當世隨分の好士なり。其の比皇后宮大夫俊成卿勅を奉つて千載集を撰ばる可き由聞えければ、既に行幸の御友に打出で給ひけるが引分けて……築地越しに、身こそ斯る有様に成り候へども、候はざらん跡にても此の道に名を懸けん事、生前の望みなり。集撰ばる可き由承る。此の卷物の中に然るべき物候はば、一首入れられ候なんやとて、箆の中より百首の卷物を取出し、門より内へ投げ入れ通られるこそ哀れなれ……。

とある。次の東國大名の事は簡略であつて、他本との關係は不明である。次に維盛都落を述べるがこれも長門本と近似する詞章が多い。次の他大納言都留も同様である。平家都落の條に、經盛の歌として、古里を燒野の原に顧見て末も煙の浪路をぞ行くと述べ、續いて、惠美押勝の事がある。長門本、延慶本、盛衰記にもある記事であるが、長門本に近いと謂ふべきで、次に、

昔玄宗皇帝の御時、安祿山謀叛を起し、河州瀧州九千餘州皆亂れて天子の命に隨はず、其の後玄宗皇帝の時、貞元初め、西戎を討たんとす。大將軍風翔の地を出でざるに依り、叶はざる處、西涼伎師子舞を愛しける間、木を刻みて頭となし、糸を以て尾を作り、金を以て眼を鏤め、銀を以て齒を疊みなどして舞ひ踊りければ、貞元の邊將此の曲を愛し酔ひ居咲み見る。見れども飽き足らず賓を楽しましむ。士を構ひ得て監將を宴せし時、終に謀り出して討たれぬ。然れば此の心有る人の云はく、

難波方境遙に浪越えて憂き名を流す須磨の浦哉

と讀めり。而れば平家も斯る計らひも何か無かるべき。甲斐無くして都を落ちし物かなと人申せば、亦人申す、理りや彼の封[□]の臣は愚かなれども此の頼朝朝臣は賢ければとぞ云ふ。

とある條は他本にない所である。次に人々圓融坊へ登山、源氏入洛、法皇還御、公卿會議平家福原落（やや簡略）を述べる。

最後は、

異口同意に申ければ、二位殿も大臣殿も喜びの涙に咽び給ふ。昨日は東山の關の東に踏喰を並べ、今日は西海の八重の鹽路に纜を解く。雲海沈々として日西天に暮れ、煙波皓々として霧孤島に峙つ。

曲浦の波を分くれば月千里に浮び、浦の砂に立つ船は半天の（雲に）坂登る。平家の露の命、松浦船の差し行く江を知らず、月を友と爲し日敷を経れば心筑紫に着きけり。

とあるが、これは四部合戦狀本の特異な詞章である。

以上卷七を概観するに、長門本に類するか、又は長門本を簡略にしたと認むべき所が多いが、又一方に於いて長門本よりも延慶本に類する語、盛衰記に類する語を含みて、極めて複雑な詞章を有すると共に、更に四部合戦狀本のみに見る特異な詞章もある。よつてこれらをすべて推察すれば、長門本を基として他の異本を参照しつつ記録的に構文したと認むべきであらうか。この様な詞章を基としては長門本、延慶本の如き詳細な記述は容易に生れて來ない。従つて四部合戦狀本を長門本延慶本より先出と認むべきではなく、四部合戦狀本は長門本その他の諸本にある詳細な記事や文學的抒情的表現を極力簡略にしたと認むべきで

ある。

卷八は缺である。

卷九は、他の諸異本と詞章において長文の一致する所がなく、四部合戦狀本が特に編著と認められる特種な性格を示してゐる。

卷頭に序として、

元暦元年甲辰正月一日院御所六條西洞院大膳大夫業忠宿所なりければ……内の拜禮無ければ……天下の小朝拜も無し。

とある。ここを元暦元年とするのは長門本、延慶本、盛衰記で、一方流本は壽永三年とする。八坂流本も又壽永三年である。四月十六日改元である。「天下の小朝拜も無し」は四部合戦狀本のみのである。

平家屋島にての動靜に、

都にてはさすが是くは無かりし物を、何賀戀しくぞ思食されける。は延慶本に近い語である。續いて義仲院參の事を述べるが、長門本にはなく、延慶本に近く、

同十日木曾左馬頭義仲、院の御所へ參り、平家追討の爲に西國へ下向すべき由申し入れければ、仰せけるは、本朝神代より傳はりたる三種の寶物有り。神璽寶劔内侍所是れなり。相構へて事故無く返し入れ牽れと云々。木曾畏り承りつゝ罷り還り出で立つ處に、同じき廿六日、東國の軍兵宇治勢多より亂れ入る。

とある。傍線を付した所が延慶本に類する、これは一方流本などでは、三草勢揃の章に見える範頼、義經院參の條の勅命である。又廿六日は、長門本、延慶本は二十日とあり、一方流本などには日時を示さない。續いて範頼に従ふ武士の名があげられてゐるが、順序は長門本に

近いが、長門本には、武田太郎とあるのが、本書では、武田太郎信義といふ様に、名をあげてゐる。延慶本、盛衰記は同じく名をあげる。

この義仲院参と東國武士の交名との間に、長門本延慶本、盛衰記、一方流本、八坂流本等、生食、指墨の名馬、高綱と景季との先陣の物語があるが、本書は、宇治川先陣の後日譚として簡略に述べるのみである。範頼の従者の中に、長門本にない者として、熊谷次郎直實、猪俣近平六則綱等を加へて居り、義經の従者の中には、「副將軍には安田三郎義定、大内冠者惟義」とあるが、長門本にはなく、延慶本にありて、延慶本との關係が深い。畠山重忠の言にて宇治川を渡るが、他の諸異本には畠山重忠の装束が述べられてゐるが、本書にはなく、次に高綱の先陣を見るに、極めて簡略であつて、

梶原源太の馬は繩を頸に懸け押流され、遙かの下より擧る。佐々木四郎の馬も繩を頸に懸けけれども、大刀を抜き繩を打切り、一番に種擧る。彼の馬は鎌倉殿の祕藏せられたる生濟と云ふ名馬なり。黒き馬の餘見七寸、太く肥く人を喰ひし時生濟と付けらる。梶原源太鎌倉にて申しけれども賜はらず。高綱賜はる其の故は、高綱遅く参りたれば、佐殿何に遅くはと仰せられければ、親の葬送を仕り候が、君の仰せを重するに依りて、茶毗も未だ見了てずして参り候と雙眼に涙を浮べければ、鎌倉殿御感有り、この馬を賜はれり。この馬と申すは奥州秀衡の嫡子、栗屋河の五郎、父に隠して佐殿に奉る馬と申す。奥州一の名馬なり。高綱之を賜はる。

とあり、傍線を付した所は、他の諸本に見ない語である。橋桁を渡す武士の様も簡略である。宇治河合戦の次には、木曾院参の事がなく、

義經院参の條には、義經の装束を述べるが、名乗りは、

残りの五人は誰ぞ。一人は武藏國の住人河越太郎重頼の子息小太郎重房、相模國の住人梶原平三景時の嫡子源太景季、一人は同國の住人澁谷三郎庄司重國の子息馬充重助、一人は近江國の住人佐々木四郎高綱と次第に答へ申しければ、煩瑣共に哀れ大將軍やとぞ讃めらる。とある、長門本には畠山庄司重忠が入り重頼重國をあげて重房はなく、各自の装束を述べて詳細である。一方流本は、安田三郎義定、重忠、景季、高綱、重資の五名である。百二十句本の語に近く、本書は恐らく最初に、「畠山庄司次郎重義が子に畠山庄司次郎重忠」とあるのを脱したものであらう。とすれば、百二十句本と成立上關連があらう。河原合戦、木曾軍勢の手分け(他の諸本は前出)越後仲太家光自害と續き、残る勢僅に七騎となり、その中の軀繪については、

七騎の中の一騎は女武者、軀繪と云ふ美女なり。齡三十一、大力の豪者、強力の精兵、矢續早の手聞、究竟の馬乗、木曾毎度の合戦に之を具し、童の様にして腹巻に三枚甲を着、弓矢を用ちつ、太刀を帶ぶ。

とあり、次の義仲の奮戦の條には、

行合ひ々々戦ふ程に、主従四騎にぞ討ち成され、軀繪と云ふ女武者も討たれや爲ぬ、落ちや爲ぬ、行方知れず。

とあつて、軀繪の奮戦は少しも述べないのは本書の特質である。義仲の装束には、

赤地の錦の直垂に、白き唐綾を以て鬼したる鎖、白星の甲、高鷄尾の征矢、繁籐の弓を用ち、連錢葦毛の馬の太く肥き餘見に七寸黄伏

輪の鞍置いて乗つたり。

とある。これも他の諸本と異なる所がある。木曾最後、今井兼平最後も簡略であり、樋口次郎兼光最後も、

今井の下人、八幡の大渡にて行き合ひつゝ、君も討たれさせ御在しぬ。今井殿も自害しぬと云へば、世の中今は降ござんなれ、相具したる軍兵共に云ひけるは、命惜しき人々は入道出家もし、乞食立頭陀し、志有らば君の後生を訪らひ奉る可し。兼光は君の死し給ひし所、今井の骸の前に向つて死なんと申せば、五百餘騎の者共、思ひ思ひに落ち行けり。

の如く簡である。傍線を付した語は百二十句本と類する所である。樋口の郎等、千野光弘の奮戦の條に、筑紫武者原十郎と組討をする事は長門本延慶本のみにある記述である。本書はこれらと關係があらう。次に新攝政（師家）の停止については、

同廿四日新攝政を留め奉り、本の攝政還補し給ふ。僅に六十日と云ふに留められ給ふ。程無く見えてぬ夢なり。昔栗田口の關白喜び申しの後、只七日こそ御せしか、而る爲師も有りしに、是は六十日の間に、除目も二ケ度まで行はれしかば、思出御在せざるに非ず、又一日なれど攝録を行ひ給ふこそ珍重しけれと申す人も有りけり。

とあり、これは長門本延慶本に近い語である。義仲の首渡されの條には、

法皇御車を六條東洞院に立てて御覽ぜらる。時に何者の讀みけるやらん。

信濃なる木曾の御料に汁懸けて只一口に九郎義經

何なる尾籠の者の仕態にや、鳴借かりき。

とある。狂歌は盛衰記の歌と同じである。續いて、

傳へ聞く虎狼國衰へ諸將蜂の如く起りしに、沛公先づ漢陽宮に入ると雖も、項羽後に來たらん事を恐れ、更に金銀珠玉をも納めず、阜馬美人をも馴付くる事無く、徒に函谷關を守りつつ、漸々に敵を亡し、終に天下を治むる事を得たり。義仲も先づ都に入ると雖も賴朝の下知を守らましかば、沛公の計言に劣らざらまし。忽に惡行を好み天命に隨はず、剩へ法皇の仰せに背いて、謀逆に及び惡事身に餘り、首を京都に傳へ、恥を後代に残す事尤も愚なる哉。

とあるのは、卷九に於いて最も長門本に近い長い詞章である。

樋口被斬の條も他本に比して極めて簡略である。次に平家一谷城郭構へを述べて、

權亮三位中將も福原より商人の便りに、君達の御許に消息を奉り給ふ。其の便りにぞ亦御返り事も有りける。維盛御文細々と書き留め奥に、

合はん事は何を渚の濱千鳥波の立居に音をのみぞ泣く
北の方も御返事細々と書き留め給ひ奥に、

身はここに心は其れに在明の盡きぬ思ひを我如何せん

此の三位中將白地に人と打語らふ事も爲給はず、或夜に餘三兵衛重景、石童丸を近づけ付けて……。

とある條は、他の諸本になく、本書の特異な文である。

六箇度合戦も簡略であり、範賴義經に隨ふ軍兵の交名も長門本、延慶本、盛衰記とも異なる所がある。三草合戦の條、田代冠者の先祖につい

て、

俗姓を尋ね承るに、後三條院の第四の御子、佐王有祐五代の孫。

とあるが、一方流本には、「後三條院第三王子、資仁親王より五代の孫也」とある。長門本に、「後三條院第三王子左皇の五代の孫」とあり、盛衰記に、「後三條院第四皇子、御子左皇有佐五代孫」とある。この盛衰記の皇子を脱したものはあるまいか。「みこひだりのみこと」と近家本は讀んであるが、後三條院の第三皇子が輔仁親王、その子が源有仁で、誤りがあらう。

通盛、教經が一の谷の山の手に向ひ、通盛が女房(小宰相)を迎へて名残を惜しむ次に、本書では、六日の卯の尅に、鹿が三疋山より下り、伊與國の住人高市武者所清則がこれを射殺す事がある。一方流本などは谷落しの條に出すので後に述べる所である。長門本、延慶本は本書と記述の順序が同一である。三草合戦の條には老馬の事がなく、鷲尾の庄司に就いては、

何者ぞ。此の山の案内者狩師にて候。何れの所の者ぞ。地體は美作國或る山方に小六と云はれ候ひて、當時は丹波國葦名の鷲尾と申す人を憑みて鷲尾と申す所を預りて、鷲尾の庄司と云はれ候と申す。將當時も其れに有る歟。左も候はず。年老い衰へては人を憑み、事合期せず候間、當時は此の山の邊に庵を結び、山を搜して甲斐無き命を生きて候と申しければ……。

とある。他の諸本とも異り、本書のみの特異な記述である。又その子に就いては長門本、延慶本には述べず、本書は、父子三人として、父子三人の者共一所に寄合ひ歎きの涙限り無し。庄司申しけるは、

別れの道の切なる、親の別れ、子の別れ、何れも愚ならず、己等十六十三まで生長置き、別る事こそ悲しけれ。左りながらも汝等君に思はれ奉り……元服せよとて、義經の兩字を兄弟に下し賜ひ、熊王を鷲尾三郎經久と名負らしめ、一法師を鷲尾四郎義久とぞ召されける。

とあり、二人共に奥州にて義經と共に討死した由を述べてある。これも本書の特異な記事である。次に、熊谷平山一二の懸に於いて、熊谷は褐地の直垂に黒革鬼の鎧、權太栗毛と云ふ馬に乗り、子息小次郎直家は、藍摺の直垂に節繩目の鎧、黄河原毛の馬に乗り、幡差は秋野摺つたる直垂に、黒革鬼の腹巻に三枚甲を着て、大刀帶び、鹿毛なる馬に黒鞍置いてぞ乗つたる。

とある。他の諸本とも異なる所がある。百二十句本と類する所は、熊谷の黒革威の鎧、小次郎の黄河毛なる馬の二語であり、長門本、延慶本と類する所は、旗差の、秋野を摺つたる直垂と三枚甲である。一方流本とも大いに異なるので本書の成立が極めて複雑であることを示すものであらう。

梶原二度の懸に、

白旗赤旗色々交りたるこそ面白けれ。東大手生田の森より梶原平三景時先陣と覺えて進む。平次景高生田の森の方を見互して、

風吹く駒が林を今朝見ればまだ古巢にて替らざりけり。大將軍蒲の御曹司仰せられけるは、大勢を待ち受けて軍を爲よ、先に進みて敵の的と成るなど有りければ、梶原之を承り、若黨共痛く進みそ、大勢を待てと云ひければ、景高之を聞きて、

昔より執り傳へたるあづき弓引きては人の返す物かは
と申させ給へと先だつてぞ進みける。

とある。これも前の歌は他の諸本に無く、本書の特異なるもの、大將蒲の御曹司以下は、一方流本、八坂流本諸本にあるが長門本、延慶本にはなく、盛衰記には存する。この記事の次に、河原兄弟討死の事がある。一方流本などと順序が異なる所である。景時の名乗りは、

名負りけるは、遠き者は音にも聞きつらん、近き者は目にも見よ。

昔八幡殿、奥州の貞任、宗任を攻め給ひける時、後三年の戦に御共申し、金澤城の合戦に、生年十六歳にて、左の一眼を射させ、その矢を抜かずして、當の矢を射てその敵を取り、名を後代に止めし鎌倉の權五郎景政の三代の孫、相模國の住人梶原平三景時と名乗つて平家の陣へ懸け入る。

とある。これは一方流本に近い詞章である。次に、源太の風流を述べ、

此の源太と申すは、同じ東の武士と云ひながら、内に情有り、外に色有る男子、合戦の庭に好して、斯る事は二月上旬の比なり。初櫻一枝手折りて簾に差して戦ひければ、懸くる時も颯と散り、復引く時も颯と散る。甲の鉢鍔の左右の袖の上に散り澄ましかれば、情有るも情無きも、皆人目を付けて見る中に、平次景高之を見て（歌缺）亦景高是を、（歌缺）、又景季是れを（歌缺）。

とあつて、本書の特異な所であるが、三首の歌は後に入るべく空白であるのは、或は編者の創作せんとして未完であることを示すものであらうか。義經の坂落しの條、二足の馬を落す所も他本と異り、盛俊の

最後の次に重衡生捕の事、濱軍知盛の事の次に忠度最後、師盛、敦盛最後を述べてある。何れも諸異本に比して簡略である。敦盛最後の條に、

故入道殿の舍弟、修理大夫經盛最愛の末子、無官太夫敦盛生年十六歳、必ず後世を訪へと言ひ給ひ乍ら、小聲に念佛十遍計り申し給ひければ、直實慍に領狀申し、悲しみ乍ら首を取る。其の後髑髏を押し返し見奉れば、右の腰に漢竹の揚杖（横笛）巻物一つ副へて差されたり。引開き見ければ、女房よりの御文と覺えて、都を出て御した後、様々の恨み詞共を書き、其の奥に是く留めらる。

人故に流す涙の露けて袖も袂も朽ちぬ可き哉

後に案内を尋ねければ、是は門腋中納言教盛の御娘、今年十四歳とぞ申しける。

とあるのは、本書の特異な詞章である。土谷四郎兄弟が業盛を討つ事は、一方流本にはなく、長門本、延慶本にあり、小宰相入水の事にては、通盛と小宰相の戀物語が先に述べられて、他の諸本と順序が逆であり、最後に、

大臣殿より御訪ひの使遅かりければ、恨み奉り中納言教盛はくぞ申させ給ふ、

問へかしな別れの袖は波の上枕も寝も浮かぬ計りに
大臣殿是を御覽じて、理り哉と覺して、急ぎ御返事有り、
外に思ふ歎きならねば誰にかは身より外には問ふべかる覽
とある語も本書の特異な所である。

以上卷九を通觀するに、十二卷本に比しても記述が簡略であり、抒情

的性格を持たず、記録的な記述に偏して居ることは注目すべきである。と共に他の諸本と類する長い詞章が少く、他の諸本との關連が確實に把握し難く、長門本、盛衰記、延慶本と僅に類似する所のあるのは、此等を参照しつつ編著したのではないかといふ推測が成立つ。又同時に本書の特異な詞章があるのは他に根據とすべき傳誦が存在したことが想像せられる。

卷十、この卷は全體としては長門本に近似する詞章を有する。随つて長門本なくしては成立しないものと認められよう。卷頭に、元暦元年甲辰二月十日一谷にて討たれたる平氏の首共京へ入る。

とある年時が、既に他の諸本と異り、長門本と一致する。一方流本は壽永三年十二月七日である。百二十句本は二月十二日である。次の維盛北方子供の数きも一方流本よりも長く、長門本、延慶本に近い詞章である。平氏の首被渡事も、略長門本に近いが、

範頼義經等の申狀、強ちに御許容有る可からずと申されければ、渡さるまじきにて有りけるを、範頼義經重ねて奏しけるは、保元の昔を思へば祖父爲義が敵、平治の古を思へば、父義朝が讎なり、則ち父義朝の首大路を渡し獄門に懸けられき、父祖の恥を雪めん爲、君の仰せを重ずるに依り、命を惜しまず合戦を仕る。申す所御許容無くば自今以後何の黜有つて朝敵を追討すべきや。義經殊に申しければ力及び給はず渡して懸けられぬ。

とある條は、前後は長門本に近似するが、傍線を付した所は一方流本に近く、傍點を付した條は、百二十句本に近い語である。續いて、

見る人數を知らず、帝闕に袖を連ねし古へは、怖ぢ恐るる輩多かりき。巷に首を渡さるる今は涙を流さずと云ふことなし。

これも長門本等になくして、一方流本の本文に略一致する。これによりて首渡は長門本の本文と一方流本との混合本文と認むべきであらう。齋藤五、齋藤六の平氏の首を見る條も略長門本に近く、次の重衡渡されの始めの邊、

十四日重衡卿六條を東へ渡さる。高きも下しきも之を見て、あはれ（此の人は）入道殿にも二位殿にも覺えの子にて御せしかば、一門の人々も重き人に思ひ奉り給ひしを、呼は何事ぞ、院内へ参らせ給へば、老いたるも若きも優しく奉られし物を、有る所にては口をかしき事共云ひ置き給ひ、人に忍ばれ給ひし物を、何なる罪の報にて是く成りし、南都を滅し給ひし罪の報にこそと人申し合へり。

とあり、長門本に近似するが、傍線を付した語は長門本になく少しく異なる所もある。この後も長門本に近く、

重衡卿申されけるは、斯る身に成りては、親しき者共に面を合すべしとも覺え候はず、今一度見給はんと思ふ者も候はじ。重衡千人萬人の命にも三種の神寶物をば替へ進せんと、宗盛以下の人々一人も世も申し候はじ、女の情候へば、母儀二品などや無慙とも思ひ候はむ、その外は哀れを懸く可き者も覺え候はず、何事か候、主上還御無くば内侍所計入れ奉る事叶ひ難く候……。

とある。傍線を付した所は他本に見えぬ所である。

次に内裏女房の事も、長門本に近く、それよりは簡略である。知時の語を、

年來此の君に候ひし友時と申す者にて候。指して弓矢取る者にて候はねば、合戦の御友仕り候はず。何様も候へ、都を落させ御在しし御友ばかりこそ候へ。八條の女院に兼參の者にて候ひしかば、時に女院に召し置かれ、力及ばず留り候ひき。昨日大路を渡され給ひしを見奉り候に、余りに目に當てられず、哀れに思ひ進らせ悲しく候へば……。

とあり、一方流本、八坂流本とは甚しい差がある。次に「御一身計りは何事か候可き、而り乍らも腰の力を取り入れけり」とあるのは一方流本の本文に近い。重衡と女房との往復の歌は缺文である。重衡戒文の條は、

三位の中將亦土肥次郎に合ひて、出家せんと言へば、御曹司に達し申せば、御所へ申し、院へ申されたれば、頼朝に計らひてとて免されず。而るを上人を呼びたてまつり、後世も申し誂へ、臨終の作法も聞かんと言ひ給へば、上人は誰にて候ぞと申せば、黒谷の法然とこそ仰せられければ、請じ奉りつ。本三位の中將上人に申されけるは、南都を亡せし事、重衡が所爲と皆人申し、上人も佐こそ聞食され候らめ、重衡火を放ち申さず、惡黨多く候ひて火を出し候ひき。

〔中略〕其の罪少し覺え懺悔し候。且つは生身の如來と皆人仰ぎ奉る上人に、生きて又見參に入る事も、然るべき善知識と存じ候。出家の志候へども、免され候はねば、本鳥を付けながら戒を授けさせ給へと仰せられければ、上人戒を授け奉り給ふ。年來通ひ遊び給ひし侍の許に有りける雙紙箱を召し寄せ、御布施と覺えて、上人に奉り給ふ。是を人に賜はらず候ひて常に御覽せられん處に打置かせられ候

ひて、重衡の物ぞかしと思食し出され候ひて、御念佛候可しと泣く泣く申され、上人も衣の袖を濡し、雙紙箱を懷中してぞ返られける。

淨土宗の要略を省き、受戒の語を少しも述べないが、その他の詞章は長門本に近似すると認むべきであらう。宗教的なものに全く關心がないのは、他の合戦の間にはさまれた文學的表現を省略したものと相類するものがある。次に重國院宣使の事がある。他の諸本と順序が異なる。しかし院宣の本文の前は、長門本、延慶本に近い詞章である。院宣の文は諸本と小異がある。次に、

十八日在々所々武士の狼藉を留む可き由、院宣を下さる可きの旨、藏人左衛門權佐定長院宣を承り、頭右中辨光雅朝臣に仰す。同廿二日諸國兵亂米を留む可き由又左衛門權佐定長、頭右中辨光雅朝臣に仰す。同廿七日重衡卿西國へ下し遣し使、重國歸參し……とある。十八日、二十二日の記事は、全く長門本、延慶本の本文に一致する。これは明らかに長門本によると認むべきであらうか。次に諸文の本文に、

御在位已三ヶ年、政訪堯舜之故風、とあり、傍線を付した語は、一方流本の語であり、

君以臣爲心、臣以君爲體、見漢書とあり、この「見漢書」は他本になく、

臣内不樂、君外無喜

は長門本の本文に一致し、

平大將軍貞盛自追討相馬小次郎將門以來、鎮東八ヶ國、傳子々孫

々、

は長門本になく、一方流本にある語である。

保元平治兩度合戦、且君御爲、且爲國更不顧身命

この語は本書の特異な語である。なほ長門本にある語で省略されたと認むべき語が若干ある。次に、

三月二日本三位中將重衡卿土肥次郎實平の手より九郎義經の手へ渡す。冥途の罪人の獄卒の手に渡るも是くこそ有りけめと思ひ合せ給ふ。

同五日主馬入道盛國、同じく子共九郎義經之を召し執りて禁しめ置かる。

同七日板垣三郎兼信平家を責めんと西國へ下向す。

この記事中、傍線を付した所は諸本に無く、本書のみの語である。五日の記事は、延慶本にのみありて、長門本、その他の諸本にはない。延慶本と關係が深い語である。七日は長門本、延慶本の語に類する。一方流諸本にはない語である。

次に重衡關東下向の條では、道行文は本書は簡略であり、且つ他の諸本と類しない所がある。池田の長者の物語では、

彼の宿の長者勸修寺の出水侍従と云ふ。土肥次郎實平道すがら思ひけるは、恥有る女人を呼び、中將の御心をも取り延べ奉り、都の外

の思ひ出にもと思ひて、彼の侍従を呼び中將に奉る。
とあつて、本書のみが勸修寺の侍従とする。中將と侍従の歌も本文を缺き、侍従の老母を偲びての歌も本文を缺く。最後に、
都を出て十七日と申せば關東鎌倉へ入り給ふ。春も既に暮れなん

とす。遠山の花は殘んの雪かと打見え、來し方行く末の事共種々思ひ連け給ふにも、而れば是は何なる先世の宿業の拙さと思ひ給ふぞ悲しけれ。御子一人も無きを歎き給ひ、二位殿も本意無き事に思ひ給ひ、大納言の佐も歎き給ひつ、佛神に祈り申されき。今の思ひには、賢うこそ子は無かりけれ、(あらましかば)何に心苦しからましとて、思ひ殘さるる事も無し。明くれば頼朝に對面し……。

とある。これは長門本の本文に近似する所である。頼朝對面の條と千手の事は極めて簡略である。従つて文學的表現には餘り熱意を示さない。

其の夜兵衛佐殿は美女一人を出し、中將殿心評に言ひ遣る。明くれば美女返れば、夕部何事か有りしと御尋ね有りければ、廻骨と云ふ樂をこそ調らべ給ひしかと申せば、頼朝、是を聞食す。後朝に弘基參られ、此由物語し給へば、大膳大夫涙を流し、此の中將御年盛りにて、此の樂、一期一度より外彈ぜぬ樂と申し、我が身の限り思食して袖を唾らると。明れば鹿野介宗茂中將を引具し奉り伊豆の鹿野へ入る。

この次に千手を鎌田兵衛政清の憑んだ鏡宿の遊女千鶴の娘千手と述べてゐる。これも他本に見ない語である。

維盛の高野參詣の條は、

舊里に留め置き給ひし北方、少き人の面影も身に副ひ、片時も忘れ給はねば、有るに甲斐なき我が身哉とて、元暦元年三月十五日の曉、忍びつゝ屋島の館の間ぎれ出て、餘三兵衛重景、石童丸と云ふ(童)、舟に心得たればとて、武里と云ふ舍人、此等三人を引具し

で、屋島の館を忍び出で阿波國壹岐の浦より小船に乗り、鳴戸の洋を漕ぎ渡り、紀伊路へ越き給ひつゝ、和歌吹上の濱、衣通姫の神と顯れ給ひし玉津島の明神、日前國懸の御前を過ぎ、由良の湊と云ふ所に着き給ふ。是より山傳ひに都へ趣き、戀しき人共にも今一度見んと思ひ給ひ、舳をやつし給へども、尙人にはまがふ可くも無し。本三位中將の捕はれたるも心憂きに、我さへ憂き名を流さん悲しく、千度心は進みけれども、心に心を諍ひて、泣く泣く高野へ参り給ふ。

とある。傍線を付した所は一方流本と異なる所で、前半は一方流覺一本と殆ど同一であるが、後半は、長門本と殆ど同一である。これは本書の成立を明白に示す好例ではなからうか。次に横笛瀧口の物語がある。建禮門院の雑仕に、刈蒲横笛の二人の女のあるを述べるのは、長門本と同一である。横笛が歌を詠みて柴の編戸に結びつけ大井河に投身するが、これは他の諸本と異り長門本に類する所である。

嵯峨殿の御前の橋より上、桂河の橋より下、大井河桂河松淵と云ふ處に臨み、具しける女の童に種々の形見共父母の方へ返し、生年十七歳と云ふに、仲淵に身を投げたり。時頼入道此事を聞き急ぎ來つゝ、葬送して骨を取り、寺々に納め後世の菩提を訪へり。

とある。この章も簡略である。次に維盛、時頼對面の事があり、これは、長門本に近く、高野巡禮の條に、

瀧口入道を先に立て、堂々巡禮し給へば、或は説法衆會の場もあり、或は坐禪入定の窓もあり、念佛三昧の道場、即身成佛の臺何れも取り取りに、又天竺より傳はり大師御相傳の御法服七帖の袈裟、

之を見彼を聞くにも貴からずと云ふ事莫し。奥院に大師の御廟を拜し給ふ。抑延喜の御門の御時……。

とあり、一部長門本に近似し、傍線を付した所は、他に見ない語で、本書の特異な所である。又延喜の時の勅使を、勸修寺右少辨とするのも本書のみである。次に流砂葱嶺高野御幸の事はなく、維盛出家の事を述べるが、長門本に近く、

其の夜は昔今の物語し給ひて泣くより外の事無し。彼の高野山と申すは帝城を去つて二百里……八功德水とも云つべし。聖の行儀を見給へば……。

傍線を付した條のみは他本と順序が異なる。重景の語に、

惡源太に遠矢にて御馬の太腹を射られ、材木の上に落ち懸らせ給ひ、政清兵衛落合ひ奉りければ、景康も落ち合ひ、後政清打手に入る處、惡源太に射られ候、父にて候し物は正しく故殿の御命に替り進らせ候ひき。

これは他本にない所で、平治物語に依る所であらう。維盛の熊野下向の條は、一方流覺一本に近く、

漸う差し給へども、日數も経れば、岩田河にも懸りぬ。此の河の流を一度も渡る物、惡業煩惱無始の罪障消ゆなる物をと憑しく、相構へて本宮に疎に歩き付き給ふ。證誠殿の御前に樋居つゝ、暫く法施進せて御山の様を拜し給ふに、心も詞も及はれず。凡そ大悲權現(中略)妄想の露だも結ばず、一心敬禮と唱ふれば、諸佛菩薩も影向し、第二第三を禮すれば、罪障消滅残り無し。何事に付けても、憑しからずと云ふ事莫し。證誠殿の御前に跪きつつ、禮石に禮拜恭敬始めよ

り父大臣殿、命を召して後世助け給へと申し給ひけん事思食し出で
つつ……妄執尙盡きずと（覺えて）悲しけれ。

とある。傍線を付した處は長門本の詞章に近い所である。これも長門
本と一方流本との混合文と認むべきであらう。那智籠りの僧の維盛の
舊時を偲ぶ條に、

青海波を舞はれしに、御身に餘る勾ひ、嵐に傳り、廻絶の袖の色風
に飄り、前を臨めば月卿冠を並らべて十二人、後を顧みれば雲客袖
を連ねて十五人、垣代に立ち、目出たかりし事ぞかしと申し出づ。
本宮（より）苔路を差しつつ、新宮へ参り給ふ。峰の松風冷じく、妄
想の夢を寢し、河水の波清くして煩惱の垢を濯ぐ。其れより、雲取、
紫胡峰と云ふ峨々たる山を超え、那智の御山に参り、給ふ。西樓の月
峰に落ち、紅の霞片班、中殿の燈残り、瀧白王散亂す。三つの御山
何れもく取りくなれども此の御山殊に勝れて貴し……（中略）寛
和の夏の比花山法皇……。

とありて、傍線を付した所は、盛衰記に一致する點があり、傍點を付
した所は長門本に類する所である。維盛入水の章に、山なりの島が
（諸本）本書には帆立島とある。此の章も全般としては長門本に近似す
る所である。池田大納言關東下向以下も又長門本に近い所が多い。

廿八日新帝御即位有り。大極殿も未だ造らねば、太政官の廳にてぞ
行はれける。是後三條院の御即位、治暦四年七月の御例、神饌寶劍
無くして、御即位有る事、先例の事無し。神武天皇より以降八十二
代是ぞ始なる。八月十六日、九郎義經一谷の勳賞に左衛門尉に成さ
る。則ち使の宣旨を蒙り、九郎判官とぞ申しける。

同十五日屋嶋には秋も中半に成り哀れと覺えて、月冷じく風秋（以
下脱字）

同十八日、九郎判官義經五位尉に留つて、九郎大夫判官とぞ申しけ
る。蒲御曹司範頼三河守になる。

九月二日、參河守西國へ越く……。

これは全く長門本、延慶本に同文といつてもよい。藤戸合戦の條に、
上野國の住人^{（上野國）}和見八郎押寄せ、馬を離して敵の船に乗り、讃岐國の
住人^{（住人）}加部源次と引組む。源次の郎等寄りて和見八郎を差す、差され
て亡ぶと見ゆるに、和見の方より同國の住人小林三郎重隆加部源次
に引組みて海に入りぬ。重隆の郎等黒田源太と云ふ者、主は敵に組
んで海に入りぬ、何か成りけん^{（成りけん）}と見る處に、水波のある所を怪し
み、弓を差し入れ振れば、物取り付き上がる。見れば我が主敵の腰
に懷き付きけり。敵弓に取付きてぞ舉りける。主を船へ引擧げ、敵
は背械^{（せがひ）}に押當てて首を取る。

とある。長門本、延慶本、盛衰記等に類するが、名前は盛衰記に近似
する。

以上卷十を概観するに、全般としては長門本（延慶本）に近似し、一部
としては一方流本に類する所があり、盛衰記とも若干類する語があ
る。従つて長門本を基として一方流本、盛衰記等を参照して構文した
ものと認むべきであらう。文學表現として注目すべき内裏女房、千手
前、横笛などの物語が極めて簡略であり、戒文とか維盛入水等の佛教
的影響を示す條も簡略であつて、記録を追ふ點に主眼點がある様であ
る。

卷十一、この巻は全般的には殆ど記事か他の諸本に比して簡略であつて、他の諸本と長文の類似する詞章かないか、終に近くなつて長門本と同一の詞章を有し、極めて注目すべき巻である。巻頭に序として、元暦貳年乙巳正月十九日九郎大夫判官義經平家追討の爲に四國へ越く矣。

とあるか、極めて短く、序としても不適當である。この十九日は、十二卷本、延慶本、盛衰記は十日、長門本は十六日である。續いて義經平家追討のため四國に向はんとして院參の條に、

今度人は知るへからず、義經に於ては、平氏を責め落さすは王城へ歸る可からず、高麗鬼界、天竺震旦、陸は駒の足の及はん限り、海は船の艫械の立たん定、義經の命の候はん限り、責むべき由申す。勇しく聞え、御勅答不日に逆臣を亡はして且つは三種神器を返し入れ奉り、且つは無雙の勲功に預る可しと云々。院の御所を出て自ら打立つて、國々の原氏並ひに大名にも、院にて申し如く言ひけるは、少しも尻足を踐み、命を惜まん人は鎌倉へ歸り参り給へ、義經今度大將軍の勅宣を承りたれば是く申すそと言へり。

とある。この詞章を見るに、傍線を付した所は、長門本に一致し、傍點の所は諸本と順序を異にする所である。これを考察するに、長門本などによりながらも、又他の異本を参照して構成したものと認むべきものであらうか。

二月十四日の條に、

十四日伊勢石清水加茂の社に奉幣使を立てらる 平家を追討し、並

ひに三種の神器事故無く都へ返し入れ奉れと、今日より神祇官人、諸社司、本社本宮にて祈り申すへき由、院より召し仰せらる。

とある。長門本にはなく、一方流本、盛衰記、延慶本（盛衰記による補入）に存する。これらの諸本と關係かあらう。二月十八日の條に、参河守範頼に従ふ武士の交名がある。これも他の諸本（盛衰記）と異なる所がある。次に逆櫓の論がある。然し簡略て本書の作者は關心が薄いと思はれる。勝浦合戦では、近藤六近家の事も簡略であり、田内左衛門尉則良か河野追討の爲に伊豫へ赴いて屋島の勢の少いこと、阿波民部舍弟櫻間介良遠を討つこと、阿波の勝浦に到着したことを喜ぶ由か述べられる。この順序は長門本に一致する叙述である。中山越にて文男を生捕ることも簡略て、長門本、延慶本等にある觀音講はなく、源氏屋嶋へ攻め寄せる條に、

惣門の前の者に有りける船共に、思ひ／＼に乗り給ふ。御所の船には、女院、二位殿、北政所以下、女房達乘坐奉る。大臣殿父子同しく乗り給ふ。余餘の人々は我先にと乗り、或は一町、或は七八段、或は四五段押し出す處に、惣門の前の者に調甲にて五騎樋と出て來たる。

とあるのは一方流本に近い詞章である。義經以下の名乗りも一方流本に近い所がある。嗣信最後の章では、伊勢三郎義盛と越中次郎兵衛盛次の詞戦ひがあり、能登守の戦ひに、

能登守、船軍は子細有る物そと、直垂を著給はす、小袴に俗衣を着、唐卷染の小袖に唐綾鬼鍔、白星の甲に、高鷲尾征矢、廿四差し、繁籐の弓持ちつつ、橋船の舳に立ち、大將軍を射んと欲し給へ

ば……。

とあるのも、やや一方流本に近い所がある。全般として一方流覺一本よりも簡略であり、長門本に比しても勿論簡略である。

次に嗣信御弔ひの事の次に、判官三百餘騎となり、軍勢が疲勞の爲に寝るのに伊勢三郎が寢ずして平家の勢を待懸け、平家は越中次郎と江美次郎が先陣を爭ひて夜討を果さず志度に退く由を述べるが、これは一方流本では、弓流の章にありて、後出である。那須與一の條は、二月廿日、「柳の五重紅の袴著たる女房十七八と見ゆるが紅の扇の月出でたるを仕立てて」とあつて、一方流本とも異り、判官に射るべき人を推舉するに就いても他の諸本と異なる所がある。又全般に簡略である。弓流の條も又簡略である。志度合戦の條には、伊勢三郎が田内太衛門尉則良を生捕り、河野四郎、溝増が來會し、次に梶原も合流し十九日、住吉神主長守が院參奏上となつてゐて、他の諸本と順序が異なる所がある。壇浦合戦の條では、

新中納言船の鱧に進み出でて仰せられけるは、日本我が朝天竺震旦も、無雙の明將勇士なりと雖も、運命盡きぬれば力に及ばず、而れども名こそ惜しけれ。東國の者共に陋く見ゆるな、何の料に命を惜しむ可きぞ。何にもして九郎冠者を取つて海へ入れよ。今はそれのみこそ思ふ事には有れと……惡七兵衛申しけるは、心こそ武くとも小冠者何事か有らん、片脇に挟みて海へ入れなんずと申す。越中次郎兵衛申しけるは、九郎は色白き男の長短ききが、向齒二つ差し出でたるが驗しるし。かんなるぞ。身をやつし、尋常の鎧なんども著ざるなり。構へて組めとぞ云ひける。

とある所は延慶本に近い詞章である。遠矢の條には、長門本になき甲斐國源氏阿佐利與一の遠矢がある。これは一方流本に類する。先帝人水の條では、記述が簡略であるが、

雲上の龍下つて海底の魚となり給ふ。抑皇后宮大夫俊成卿集を撰びける間、後徳大寺の左大將實定卿秀歌太だ多く讀み送られける中に、(歌缺)、と有りければ、感じ乍ら此の歌を珍重しけれども、禁忌有りとして入れられず、今思ひ合すれば不思議なり。

とあるのは他本に見えない所である。二位殿が先帝に西方淨土へ赴くといつて入水する條も簡略で、伊勢神宮への御暇乞ひの事も無く、尼瀬何くへ行くぞと仰せられければ、西方淨土へ參るぞよとて君も入り給ふ、女院も後れ奉らず連いて入らせ御在す。

とある。能登殿最後の條も簡略である。平家の生捕の人々を擧げて後、元暦二年乙巳の春の暮は、何なる年月なれば、主上海底に沈み、百官波の上に浮びけん。此の帝受禪の日、御座の苗縁を大喰ひ、夜の御殿の御帳の内に鴿入り籠る。御即位の日、高御座の後に女房俄に紹介し、御禊の内、百子帳の前、夫男居る上、御在位三ヶ年の間、天變地天打連きて隙無し。……此の帝の御時の程無しとぞ承る。御裳濯河の御流は斯る可しやと人申し合へり。秦の始皇は莊襄王の子にはあらず……。

これも此帝受禪以後は、長門本、延慶本と略同文であり、傍線を付した所は延慶本のみに類する所である。續いて、四月三日義經の使者院參、同十六日、生捕の人々明石の浦到着も又略長門本に近く、二十五日内侍所都入り、又長門本に同文である。續いて劔卷がある。これは

簡略であるが全般的に長門本、延慶本と骨子は同一と認むべきものがある。次の二宮歸洛以後は、殆ど長門本と、同文である。即ち、二宮歸洛以下、大臣父子歸洛、建禮門院吉田入御、鏡卷、文沙汰、建禮門院御出家、大納言典侍沙汰も長門本と略同文と言へよう。一端を示せば、

本三位中將の北方は五條の前大納言邦綱入道の御娘、先帝の御乳母、大納言典侍と申しき。重衡卿一谷にて生執られ、京へ上り給ひしかば、北方旅の空に憑しき人も無くして、泣き悲しみ給ひしが、先帝に付き奉りて御せしかば、西國より上りて後は、姉の三位の太輔に同宿して、氷野と云ふ所に御し、三位中將も露の命草葉にすがりて消えずと聞え給ひければ、何にもして今一度見もし見えもす可きと思ひ給へども叶はねば、其も只泣くより外の嗚呼無くて、明し晚し給ふとぞ聞えし（刊本、六八八頁下段）

とある。この様に二宮歸洛以下の長き記事が長門本と全く一致する事は、長門本によりて成立したか、長門本がこれらによりて成立したかを吟味検討すべき重大な箇所である。然るに従來これを指摘しなかつたのは研究者の大きな缺點である。他の記事からも、又これらの記事からも、これらの中に簡略に記述せられた所がある。これを増補して長門本が成立したとするならば、長門本の本文成立には、本書中の延慶本と類する語句を除去しなければならない。これは極めて困難である。従つて本書が長門本を基として他の異本を参照して成立したと推測するのがより自然である。最後の副將（宗盛と副將との對面）の條も、略長門本を骨子とした構文と認められる。

以上卷十一を検討したのであるのが、更に考察すべき點は、建禮門

院の吉田入御と御出家の記事が本書の卷十一にあることである。八坂流諸本と同性格である。もし本書が鎌倉初期のものならば、當初より八坂流本が成立して居なければならぬ事となり、筆者の見解と矛盾がある。又從來の山田博士の所説の如く編年的な記述が平家物語の本來のものであるならば記述の順序はこれでもよいが本文が果して長門本の如きものでよいであらうか。ここにこの卷十一の本文を詳しく検討し、更に他の卷々の性格をも併せて考へるならば、本書が長門本を基としたことは疑ふ餘地のないものである。次の卷十二は、元暦二年七月九日の大地震より始つてゐる。従つて他の諸本にある記事、本書の最後の記事である副將と宗盛との對面の後に、當然あるべきものは、

副將被斬

腰越

大臣殿父子被斬

重衡被斬

である。これを缺くことは卷十一が恐らく缺損したものであらう。

卷十二、卷頭の序には、

元暦二年乙巳七月平氏残り無く亡び、西國も鎮まり、東國も安穩に、國は國司に順ひ、庄は領家の任なり、上下安堵して喜び障り無し。

とある。これは、略長門本に近く、延慶本は文治元年七月とあり、覺一本は卷頭に年月を示さない。續く大地震の記事も、又長門本に近

く、

白河法勝寺の塔より始め、或は倒れ、或は破れ崩れ、在々所々、神社佛閣皇居人家一字も残らず、響く聲は雷の如し、揚る塵は煙に似たり。日の光も見えず、老少共に魂を消し、鳥獸悉く心を迷すと見えたり。こは何事ぞと喚き叫ぶ。打殺さるゝもあり、打損ぜらるゝ人も多し……。

とある。

建禮門院の大地震にあふ事も、同じく長門本に類し、次に、八月十四日改元、源氏受領の事、義經侍の事があるが、これも略長門本に近く、建禮門院、都も尙鎮かなるまじき様を聞召して、今少し深く昇き籠らばやと思食しけれども然る可き便も無し。是へと申す人も無ければ、思食し沈みて過させ給ふ程に、秋も中半に成りぬ。盡きせぬ物思ひに秋の哀れさへ打副ひて悲しければ、最度と忍び難し。夜も長くなるままに、御寢覺勝ちにて明し兼ねさせ給ふ。

とあるのも、傍線を付した他は長門本に類する所である。覺一本には存しない。平家生捕配流、時忠流罪の條も、長門本に類し、但、時忠の北國下向の道行の條を省略して、「歸り來むことは」の歌がないのみである。時宗との離別も又長門本に類する。次に、

同じき廿八日、建禮門院大原の奥に在る寂光院と云ふ處へ候ひたる女房の縁を尋ね出し申して、喜びて渡らせ御在す。

は長門本にない所である。

次の土佐房上洛の事、前半頼朝義經不和の事は大略長門本に近いが梶原議言の條は簡略で、長門本と異り、義經の頼朝追討院宣を乞ふ條は

略長門本に近い。後半の土佐房合戦の事は極めて簡略である。

同十七日夜深更に及び、關東の家人土佐坊昌尊五十餘騎計大夫判官の六條堀河の宿所に押寄せ、夜討にせんと欲す。兼ねて用意しければ、少しも騒がず、散々に追ひ散す。仍つて熊井太郎内甲を射られ、其の夜死す。源八兵衛膝節を射られけれども死せず。昌尊は橘越に落懸りければ、手を分けて追ひけれども力及ばず。大原越藥王坂より鞍馬山に入り、僧正が谷に隠る。彼の寺の住僧搦め出した。昔大夫判官由見有りし故なり……。

とある。次に昌尊被斬がありて、昌尊の針庄事件を述べてある。延慶本卷一本に見える所である。次に足立清經の鎌倉下り、參河守被斬、十一月一日菊地高直被斬がある。何れも簡略である。

義經都落の事も大略長門本に類するが、

彼の兩人を召取り進す可き由院宣を下さる。去月十六日義經の申すに依つて頼朝を追罰す可きの由廳の御下文を成され、今月六日は頼朝の申すに依つて義經を追罰すべきの由院宣を下さる。有不定、我朝唐人本朝變夕州咲、か様の事をや謂ふ可き。朝出調、夕空しと云ふ心争か恥しめざるべけんや。

とあり、傍線を付した語は延慶本と類する所である。時政上洛、守護地頭を置く事も長門本に類するが、吉田大納言經房卿の事は長門本になく、これは全く延慶本の記述と同文ともいふべきものである。

吉田大納言經房卿は其の比勘解田小路中納言と申し、正直の人と聞えける。其の故にや、源二位、自今以後藤中納言を以て大小事共奏聞せらる可き由申されける。法皇を鳥羽殿に籠め奉り、後院免承さ

れし時も、八條中納言入道長方と彼大納言兩人ぞ別當に成されける。今源氏の世に成りても、是く憑まれけるこそ有難けれ……とある。次の平家子孫多く失はるる事も、

京中平家の子孫と云ふ者一人も漏らさず尋ね執り悉く失ふべく、腹中にも尋ね求む可き由仰せられける。平家一門廣かりしかば残り定めて多く有らむ、吉くく尋ね求めて末の世の我が子孫の敵と成すなど(源二位)北條に返すく仰せ含めければ、時政手を分けて尋ね求め……北條も子孫多く持ちければ、加様に爲すこと嚴じく思はざれども世に隨へば力及ばず。

とありて延慶本に類する。六代御前の事は簡略であるが、延慶本に類すると認められ、一致する語もかなり多く長門本とは異なる所が多い。

御乳母の女房責めて心の置き所も無ければ、其の邊を浮かれ歩き行く程に、隣の女房訪ひつゝ、此の奥高雄と云ふ山寺有り。其の聖こそ鎌倉殿にも、兼ねて大事に思はるる人にて、又、上臈の子を弟子にせんと云ひて尋ね給ふと聞くと語りければ、喜しく聞きぬと思ひ、上にも是を申さず只一人高雄へ尋ね入り、聖に値ひ奉りつ。血の中より成長して、今年十二に成り給ふ若君武士に執はれ候、佐も然るべく候はば、命生けて賜はりなんやと、聖の前に伏し並び、手を合はせ聲を揚げて喚き叫ぶ有様、寔に堪へ難げなり。聖も無慙のに覺えければ、事の次第を委しく尋ね給へば、女房起き上り、小松三位の中將殿の北方親しく御在す人の子養ひ奉られつるを、三位中將の實子と人申して、昨日武士執り奉り候と申しも了てず涙を流せば、聖之を聞き、武士を誰と云ふと問ひ給へば、北條四郎とこそ云

ひつれと申せば、聖行き向ひ尋ね聞かんと急ぎ出で給ひぬ……とある。北條關東下向の條にも、

十二月十六日に時政若君を具し奉り鎌倉へ下向す。夜半計りの進發成りけれど、何所までもとて齋藤五齋藤六も下りける。高雄の聖や上と思へども見えず、兩人ながら血の涙を流し御輿の左右に副ひ奉る。馬に乗れど勤めけれども乗らず、物だにも履かず只袖を漚りつゝ足に任せてぞ行きける。若君も御涙に咽び給ひ、何なる事と思ひ連け給ふも悲し。年も既に暮れぬ。急げやとて宿々も打過ぎく駒を早めて打つ程に、駿河國千本の松原と云ふ所に下し居ゑて、北條齋藤五齋藤六に云ひけるは、今は鎌倉も近く成りぬ……。

とある。此の邊よりは又長門本に類する所が多く、延慶本とは遠ざかつて行く如くである。

聖の思はん事も憚り有ればとて、急ぎ高雄へ入らせ給ひぬ。名目ならず賞^{かづ}邊き奉り、二人の侍までも哀み、母上の大學寺の御住居の幽なるをも細々と訪ひ奉り給へば、不慮の喜びにてぞ有りける。若君年積り給ふに任かせて容儀心様人に勝れて御しければ、鎌倉殿も不審氣に常に言ひ出し給ひて、維盛が子息は、頼朝の様に朝敵をも平げ、親の恥をも雪めつ可きか、昔頼朝を相し給ひし様に如何見給ふと仰せられければ、文學、是は底も無き不覺人なり、少しも不審しく思食され候まじと申されければ、世を打取らせて方人せんと思ひ給へばこそ乞ひ請け給ふらめ、但し頼朝一期が程は何なる者なりとも争か傾く可き、子孫までは知らぬと言ひけるこそ怖しけれ。

とある。これは長門本に近いと言ふべきであらう。次に、右大臣攝錄

の事がある。長門本、延慶本にある記事である。次に六代出家、高野熊野参詣の事がある。續いて、

新宮那智へ傳ひつつ、濱の宮の王子の御前にて洋の方を遙々と見遣りて涙を流し給ふ。平家の侍共討ち漏らされて甲斐無き命計り生たる太多有り。頭を延べて源氏に付きたり。其の中に重代相傳久しく仕へ、奉公の志深き者七八人計り、源氏にも心置かれぬ可し、亦我が身人に立ち交つて世に在るべしとも覺えぬ者共、山野に交り、此彼に隠れ行きぬ。平家亡び了てて偏へに鎌倉の世と成りて、大宮の佐と申して世にも御せざりしが、鎌倉の縁りにて、官位昇進し、今一條殿として京都の堅めにて、人の惶ぢ怖るる事名目ならず、見るも目淺しと人申しけるとかや。

とある。これは長門本卷二十の巻頭の語である。續いて、

抑平家子孫は去じ元暦（文治、長門本）二年の冬時政上落して、一子二子も残らず、腹の内を開けて見ずと云ふ計りに尋ね求め悉く失ひにき。權亮三位中將殿の御子息六代御前計りぞ、高雄の聖申請けし外は、今一人も無しと思ひしに、小松殿の末子丹後侍從忠房、屋嶋より落ちて行き方知らず……（長門本卷二十、七三八頁下段、七十四頁上段）

とあるのも、又長門本の文である。但し記事の順序は異り異同がある。丹後侍從の事は簡略である。次に、新中納言の子息大夫知忠被討事があるが、これも長門本に類する。但し本書と順序は反對で、知忠の事が先で忠房の事が後である。次に、盛次被斬の事がある。これも簡略である。

次に土佐守宗實の事がある。これ又長門本の本文に類する所である。續いて十郎藏人行家、三郎先生義憲被誅事があるが、大略は長門本（卷十九の文）に類するが簡略である。續いて、

鎌倉殿建久元年十一月七日入洛し給ふ。同九日正二位大納言に成り給ふ。十二月四日右大將に任じ、同十六日關東下向、同三年三月十三日法皇崩御成りぬ。同六年三月十三日、奈良大佛供養、門守護の爲に頼朝二月上落せらる。先の上落には畠山先陣、今度の上落には梶原先陣を賜はる。先陣三月十二日南都入御、十三日辰の尅大佛殿に入らせ給ふ……薩摩中務丞家祐……供養了てて都にて切らる。

とあり、傍線を付した所は長門本にない。次に上總七郎兵衛の斷食して死ぬ事、文覺の土佐國への流罪、六代被斬の事がある。何れも簡略である。

以上卷十二を概観するに大略長門本と類するが、延慶本に類する吉田大納言經房の事などがあつて、これらを合せて有する本書が、長門本と延慶本に分割せられて、然も詳細に増補叙述せられて流傳するとは到底考へられない所である。逆に長門本や延慶本を基として簡略にすれば容易に成立することが出来るといへよう。

灌頂卷は、卷頭に、

平家灌頂卷一通 付十二卷裏書

とある。平家灌頂卷が存在することは、一方流平曲と極めて深い關係がある。又灌頂卷の成立を八坂流古本以後の成立とする山田孝雄博士

の説に従へば、本書の成立はかなり後のものとなる筈である。にもかかはらず多くの研究者が四部合戦狀本を古態を有する傳本と認めようとするのは明らかに矛盾である。筆者はこの灌頂卷は、長門本の灌頂卷や盛衰記の卷四十八と共に（一方流覽一本の成立を最も古き形態と認めて）増補せられた灌頂卷と認めるのである。これに就いて最近、渥美かをる博士が、愛知縣立大學文學部論集（四四年十二月刊）に、「四部合戦狀本平家物語灌頂卷六道の原據考」と題する論文に、

四部合戦狀本平家物語の灌頂は、覺一本のそれと比べて成立も古く、おそらくは灌頂卷の嚆矢とも思われる。

と述べて居られるが、筆者の見解とは全く相容れないものである。又後述の如く、十二卷裏書に就いては今まで誰も論及せられた者が居ないが、これが今日存在する。そしてその成立も元亨三四年頃と認められ、従つて灌頂卷の成立も、又四部合戦狀本そのものも同時の成立と認めざるを得ないのである。次にその本文を見るに、卷十一に、建禮門院の吉田入御、女院の御出家、卷十二に、女院の大地震にあふ事、又女院御歎き、寂光院入御の事がある。従つてこの灌頂卷は、寂光院御住居から始むべきものであらう。然し以前をすべて省略するのも不備の感を免れないので若干それ以前の事を述べたものと思はれる。即ち、

抑建禮門院は二位殿に連れ奉りて海へ入らせ給ふ。東夷取り揚げ奉りつつ、御上洛有りけれども、心憂かりし波の上船の内の御住居も今は有らぬ御事と成り了てて、都へ販り上らせ給ひて後は、東山の吉田の邊、中納言律師慶惠と云ひける奈良法師の住み荒したる朽

房に渡らせ給ふ。七月九日の大地震に築地も皆崩れ庭の面も痛く荒れたてて、晩れ行秋の孤獨さに最度心細くぞ思食されける。斯れに付けても都も間近くして、物憂き事業を聞食しつつ、行き還ふ人に付けても物騒しきに、露の御命風を待たん程は何にも深山の奥へも籠らばやと常に思食しけれども、今は何事も替り了てぬる世の習ひなれば、是へと申す人も無し。自ら哀れと申す草の便も枯れ了て、誰育くみ奉る可しとも思食し寄らざる程に、信隆卿の北方、隆房卿の北方、此の兩人計りぞ忍びつつ哀れみ申されける程、召し仕はるる女房の縁に御栖を尋ね出で申せば喜びつつ渡り給ふ。御駕は隆房卿沙汰して進らせらる。九月末の事なれば、小鹽山の麓大原山の奥へ立ち入らせ給ふにも、道すがら四方の木葉の色々なるを御覽するに、山景なれば日既に暮れば、野寺の入相の鐘の聲も物幽に悲く、鹿の音虫の聲々も妙々なり。弱り行く有様何れも〳〵思ひを催し心を傷ましめずと云ふこと莫し。是に立ち入らせ給ふ程、地形幽閑の洞に寂光院と云ふ寺有り。舊き岩根の色落ち來る水の音までも最故有る様なり。緑蘿の垣紅葉の庭、繪に書くとも筆も及び難し。秋の憂へ旅の悲しみ取り集めたる心地して、浦傳ひ鳴傳ひせし時も差賀さが是くは無かりし物をと思食されける。斯りし程に後白河法皇は……。

とある。この文は長門本、延慶本、盛衰記、一方流本、八坂流本等とも異りて本書の特異な詞章である。傍線を付した所は一部盛衰記に近いと認められる。次に大原御幸がある。詞章は特異なものであるが、御幸の從者の姓名は延慶本（盛衰記による所があらうか）に近いものがあ

る。他の諸本には列挙しない所である。又女院の庵室に入つて、阿波内侍と法皇が問答なされる事を述べた後に、

法皇御庵室の内を見廻せば、一間には御寝所と覺しくて疊を敷き馴らし、上に御敷皮を引返し置かれたり。復夜の御衾と覺えて紙の御絹を懸けられたり。是を御覽するに御涙又進みけり。一間には持佛堂と覺しくて、三尺の立像の本尊、御身泥佛の來迎の彌陀の三尊に御在し、東向に立て奉らせ給ひ、佛前に淨土の三部經を置かれ、中にも觀無量壽經と覺しくて讀懸け、半卷計り卷いて置かれたり。御佛の左に繪像の普賢を懸け、其の前に八軸の妙文廿八品の尺に副へて置かれ、又右の方には善導和尚の御影を懸け奉り給ひ、其の前に九帖の御書疏を置かれ、御棚には往生要集、往生講式、其の外御心响呼計りや、淨土發心の雙紙共引散して置かれたり。

とある。これも本書の特異な詞章で注目されるがその中に傍線を付した如く延慶本と類する所が散見する。

若有重業障……端坐思實相

此等の文共被書かれたり。中にも諸行無常是生滅法、生滅々已、寂滅爲樂の文こそ哀れなれ。一切の行皆は無常なり。無常の虎の聲は耳に近けれども世路の趨り、雪山の鳥は日々夜々鳴けども栖を出でぬれば忘れぬ。羊の歩み近付き親に先立つ子、子に先立つ親、妻に離るる夫、男に後るる妻、命は水の泡の如く、老少不定の世なり。

浮敷く春の花は暮の嵐に誘はれ、夕部に出づる秋の月も宵の雲に隠れぬ。片山景の柴の庵荒れたる宿の住居の哀れにぞ御覽ぜらる。又參河入道寂照法師が清涼山の麓竹林寺にて詠み給ひける詩も書かれ、

草庵無人扶病起、香爐有火向西眠、聖歌遙聞孤雲上、聖衆來迎落日
前

雲の上に遙に樂の音すなり、人や聞きつる空耳かそも、
又大和繪師の障子に、

思ひきや深山の奥にすまいして雲井の月を餘所に見んとはとある。右の傍線を付した所は、延慶本の詞章に最も類似するものである。長門本にはなく、延慶本は盛衰記による構文であるが、本書は延慶本に近似すると認めざるを得ない。又傍点を付した歌は盛衰記と一致する語である。これによつても本書が延慶本の如きものと盛衰記との合流したものであることが推測せられるのである。次に、本書の特異な記述があつて、琵琶笛に就いて述べ、一部又延慶本に類するが、

朝在紅顏誇世路、夕爲白骨朽郊原

古へは月に喻へし君なれど其の光無き深山邊の里

と詩歌を引くのは、盛衰記に類する所であらう。

次に法皇に對して女院の六道物語がある。天上の五衰の悲しみ、人間の八苦を述べるが、天道、人間道の語はなく、修羅道、餓鬼道、地獄道にはこれらの語があつて、五道を物語るが、覺一本の灌頂卷の如く詳細な體驗は述べず、簡略にその要を示し、次に、

法皇仰せられけるは、誠に加様に承る時にぞ、五道六道も顯さん心も覺え候。是れ程萬づの事を承り、今一道殘し給ふ事こそ心に懸りて覺え候へ。同じくは申させ給へ。承り候はむ。女院申させ給ひけるは、斯る身に成りて後は何事をか隠し奉り侍ふ可き。天竺の術婆伽は后

の宮に契りを結び、寤めて夢路を恨み、阿育大王の後は、繼子蓮花夫人の子、俱那羅太子に思ひを懸け、聞かざる事を恨みつつ、齒印を取り上げ、兩眼を抜き、之に依りて、大王八萬四千人の后を亡し給ひしも淺猿かりき。又皇女は海人に近付かんとし、皇后は馬下が子に親しみ給ひし御事（あり）。而れば震旦の則天皇后は張文成に逢ひて遊仙窟を得たり。我が朝の奈良帝の御娘、孝謙天皇は惠美の大臣に犯され、文德天皇の染殿の后は金青鬼に犯され、時平の（大）臣の御娘、京極御息所は日吉に参り、志賀寺の上人に心を懸け奉り、今生の行業を君に譲り奉らんと申しければ、誠の知るべせよと詠むとかや。在原の業平は二條の后を只人と盗み、源氏の女三宮は柏木右衛門に合ひつつ、香源氏大將を（産み給へり）。

誰が世にか種を蒔きしと人間はば岩根の松は何か答へんと源氏の云ひけむも恥しや。燈に入る夏の虫、笛に由る秋の鹿、山野の獸、江河の鱗、墓無き契りに命を失ふとも承る。涅槃經の文に、所有三千界、男子諸煩惱、合集爲一人、女人之業障（寶物集卷四参照）

如來の説き置き給ひし理、實に加様の事、有るも無きも人の申す事なれば力に及ばず。世に人こそ多けれ、兄に名を立て候ひし事、是今一道と申す可し。但俱那羅太子の眼を抜かれけるは無實の名を顯しき。女人の身として晴れやる方も候はず。最度罪深く覺え候。是を六道を經と申し候。今戀しき處とは只西方の淨刹、

地獄非地獄、我心有地獄、極樂非極樂、我心有極樂と云ふ文も候。地獄も極樂も我が身に備はれり。又弘法大師の御筆

に、極樂遠からず、眼前の境界……。

とある。この文の「如來の説き置き……」以前の文は、盛衰記延慶本の詞章と極めて近似する所である。恐らくこれは寶物集↓盛衰記↓延慶本へと影響したものであらうが、本書が盛衰記によつたか、延慶本の如きものによつたかは速斷が出来ないが、延慶本によつたと推測しても誤りではなからう。

續いて、女院の説法のすぐれた事を述べ、法皇の勸めに従つて過去の思ひ出を語るのである。宗盛を高き山深き海とも憑み、法皇を西國へ御幸なし進らせようとした夜半計りに、法皇は渡らせ給はず、たのむ木の本に雨のたまらぬ心地して（この邊、長門に類する）、主上ばかりを取り進らせて、都を出で、福原の舊里に一夜を明した後、太宰府に着いたが、惟榮のために太宰府を落ち、山鹿兵藤次にたより、清經の投身を見つつ四國の屋嶋に渡つた（太宰府落は覺一に近似する）。その後一の谷の合戦で多くの一門の人々を失ひ、一の谷を落ちて、門司赤間關で合戦があり、宗盛親子が生捕られ、知盛等は海底の藻くづとなつた。宗盛父子は鎌倉に下されて後、篠原で斬られ、重衡も木津河で斬られた。以上の思ひ出を述べた後に、愛別離苦の悲しみに及び、安德天皇の幼くして失せたことを歎き、獨り後世を訪ふ由を語り、續いて、世の中に道心を發すためが多いとして、宗貞少將、藤原相如（以上二人の事は寶物集によるか）をあげ、一條攝政の子、前少將後少將の事、釋尊の入滅、漢の明帝の李夫人に別れ、玄宗の楊貴妃との別れ、和泉式部の小式部の別れ（寶物集によるか）等の愛別離苦を再び説き、妙尼々の事を述べて、世の無常に及び、釋尊の語、白居易の語を引き、菩提

心こそ最もすぐれたもので、空觀無生の信心を凝らすべしと説くのである。後徳大寺實定はこれを聞いて、更に女院に空觀を問へば、「諸法觀空の事、一切諸法皆悉空寂、無生無滅、無大無小」と述べ、日藏上人に語つた延喜帝の語、無言太子、阿難の物語（舍衛城の七處の無常）等を引きいてゐる。

法皇はこれを聞いて靈山說法の思ひがすると述べ、更に女院と問答があり、女院の寂光院における通夜の夢物語（龍畜經の事）があつて、法皇の還御を述べる。女院はその後都へ忍び出て法勝寺にて幽なる有様にて住まれたが、承久三年の後鳥羽院の御合戦を聞き、憂世の無常を觀じ、貞應二年の春の暮、東山鷲尾にて往生を遂げられたと結んでゐる。長い灌頂卷である。

以上によりて本書の灌頂卷の記述構成は本書のみの特異なものと認むべきものであらう。但し前半に於て盛衰記、延慶本と一致する一節の存することは本書の成立を解明する重要な點である。

三

以上の比較検討によりて本書の詞章の成立を要約するに、先づ長門本に類似する所としては、卷一の清水炎上、延暦寺の訴狀、後二條關白師通死去、延喜帝飢饉、師高配流の宣旨、卷三の義竟四郎の合戦、中宮御産の事、少將都還り、卷四の賴政の高倉宮への申狀、高倉宮最後、卷五の都還り、清盛の賴朝批判、福原院宣、維盛東國下向、義經來會の事、維盛以下都歸り、還都の事、（特に卷五は全般として長門本に

よく類似する卷である）卷六の方違の行幸、資長の事、清盛病狀、重衡維盛東國下向、佐竹隆義の事、卷七の木曾八幡願書、玄昉の事、木曾山門牒狀、貞能上洛の事、卷九の義仲最後、卷十の院宣の事、重衡東下、維盛高野詣（後半）、維盛熊野下向、新帝御即位の事、卷十一の二宮歸洛以後の長文（大納言典侍の事に至る）、卷十二の大地震、平家生捕配流、時忠流罪、六代高野熊野參詣など多くの詞章を列挙することが出来る。次に盛衰記に類似する所としては、卷一の殿下乗合の條（多田源三藏人）卷三の中宮御産の事、足摺（惠美酒三郎）、甌の事、宗盛解狀、泰親占文、卷四の日胤、俊秀等奮戦、卷六の宗盛東國下向の事、邦綱鞍馬參詣などが挙げられる。次に延慶本と類似する所は、卷一、久安三年院宣狀、卷四の信連合戦、卷五の文覺發心の由來、維盛都歸、卷七の鹽坂合戦、平家北國敗北の事、卷十二の吉田大納言經房の事、六代御前などが挙げられよう。これらの記事は、それぞれ特色あるものである。又長門本、盛衰記、延慶本が同一の記事を有しながらも僅少の差がある場合（願文など）に、それらの差違が本書の本文中に混在することが、何よりも本書の編輯物たることを明示するものであらう。更に本書のみの特異な叙述が多數存在するのである。例へば、卷二の式部大夫章經の都歸り（觀音の御利生）、卷四の橋合戦、卷五の都還りの一節、嚴島御託宣、文覺道心の由來、賴朝七騎落、富士川合戦の一節、清盛忠清を激怒する事、聖德太子、不比等、信西の政治、法滅の記、卷六の高倉上皇の御惱を法皇御歎きの事、養和の飢饉（方丈記）、卷七の平家都落の一節、玄宗の西戎を謀殺せし事、平家西國落の一節、卷九の生づきの事、維盛北方贈答の歌（二谷城郭構への一節）、

鷺尾庄司、梶原源太風流の事、敦盛最後の節、卷十二の昌尊被斬の一節、などがあげられよう。若し本書を基として長門本、延慶本、盛衰記などが増補せられたとするならば、これらの特異な記事が長門本、盛衰記、延慶本に存在しないのも不可解である。更に一方流本と類する所として、卷三の足摺、小將都歸りの一節、卷六の澄憲の歌（新院崩御の一節）、卷九の景時二度の懸の一節、卷十の維盛高野詣等があげられる。八坂流本に類するものとしては卷一に鱧の事なく、卷四の巻頭に辨内侍、備中内侍の事がなく（これは一方流本では流布本にない所である）、嚴島還御の簡略なこと、卷六、木曾元服事、卷七、經正竹生嶋詣などの存しない事もその一つであらう。かく觀來たれば、本書の成立が如何に複雑であるかが推測するに難くないであらう。四部合戦狀本がかくの如き成立であるならば、その叙述が他の諸本に比して簡略なものが多く、それが決して古態を示すものではなくして、編者の意圖によるものであることが明白であつて、殊に文學的表現や、合戦の細密な事柄には無關心であることを物語り、源平合戦を中心とした歴史的經過に重點があることになるであらう。山田孝雄博士の、平家物語を編年體に改作せんとしたといふ説も一面で認めてよいであらう。

四

四部合戦狀本の灌頂卷に、「平家灌頂卷一通 付十二卷裏書」とあるが、この十二卷裏書に當るものがここに述べる平家打聞一冊である。山岸徳平先生藏本で、江戸中期書寫、眞字九行、美濃判袋綴である。彰考館本と同一とあり、又島原文庫にも平家打聞一卷とあり、恐

らく同書であらう。とすれば三本が現存することにならう。

この書は後述の如く、四部合戦狀本の各卷の語句を解説したもので、十二卷裏書であるならば、四部合戦狀本の成立年時を明確に示す根據となるものである。

先づ卷頭に、

祇園精舎者、須達建立、此須達曾婆羅王玄孫、沙羅雙樹者、拘尸那國拘尸那城跋提河邊、釋尊入滅處、涅槃經說處也、秦超高者、秦始皇二世太子臣下、漢王莽者、如裏書、梁周異者、梁高王臣下……。

とある。これによれば裏書が存したことになるが、この平家打聞こそ、四部合戦狀本の十二卷裏書の別名ではあるまいか。或は裏書があり、後に四部合戦狀本の注解を施したものと考へられるが、眞字本の體裁、文體、内容からも、四部合戦狀本の作者の所爲ではあるまいか。

卷四、傳教大師の條に、

止觀院十二常燈誓一度自挑後四百餘才、自延曆六年丁卯至元亨三年癸亥五百卅一年、彼燈未滅以繁昌（百因緣集卷七ノ六の年號を改む）

とあり、同徳一大師の條に、

會津石弟山建立清水寺會津大寺 大同元年 丙戌平城天皇元年、從余時今至元亨三年癸亥五百一年、後時彼寺付屬弟子、名曰金與（百因緣集の年號を改む）とあり、卷五、箱根三所權現の條に、

于時人王四十六代孝謙天皇御宇元年己酉三月中旬、今至正仲二年、元亨四年甲子、帝王五十代、年序五百卅一年

とある。孝天謙天皇御宇元年は、己丑（七四九）で、正中二年は、元年

の誤りで（一二三四）、五百三十一年は五百七十五年で誤りがあるが、元亨四年は注目すべき語である。

同卷、走湯權現の條に

示現、今至元亨四年甲子帝王四十餘代年序及四百五十二年

とあり、又同卷、三嶋大明神の條に、

自朱鳥元年乙酉今至元亨二年甲子帝王五十餘代、年序六百廿八年

とあるが、元亨二年は四年の誤りで、元亨四年甲子である。朱鳥元年は丙戌（六八六）で、その間は六百四十年程である。

卷六、行基菩薩の條に、婆羅門僧正の來會を述べて、

天平八年丙子來、今至元亨三年癸亥五百九十年とある。天平八年は

七三六年で、それより元亨三年までは五百八十七年で約五百九十年と認められよう。

卷七、男山八幡の條に、

貞觀元年己卯今元亨三年癸亥一千百廿七年

とある。貞觀元年は八五九年で元亨三年までは、四百六十四年である。

以上の話によりて、本書の成立は略元亨三、四年の頃に成立したものと認められる。

次に各卷の大略を示せば次の如くである。

五

卷一では、墨付六枚、次の語の注解をあげる。

祇園精舍、沙羅雙樹、秦超高、漢王莽、梁周異、唐祿山、大臣、雄劍、公宴、格式、論言、執政、御師範、義刑、禁門、京師、長吏、

四部合戰狀本と平家打聞

釋門、塵寬、竭覺、群籍、確然、扈從、麗景殿、周公、成王、忠仁公、攝政關白、良房染殿、回祿、雌雄、珈瑾、延喜（ここに延喜天曆の御代の事を述べ、代繼大鏡第二云として、藤原時平と菅原道眞の事を記し、道眞の一代記を詳述して居る。日藏上人の事も述べて居る）融大臣、具平親王、後中書王、昭宣公、冬嗣大臣、小野宮、高明親王、天曆立

以上の中、傍線を付した語は、則天武后の事に見える語で一方流本にはない。最後の天曆立は、四部合戰狀本に「天曆立不知其數」とあるもので、本書に、「天曆立、天人天下玉處也」とある。

卷二は、墨付九枚、

廳使、村上、六勝寺、印鑑、鳥羽院、度緣、世美丸、四明、傳教、慈覺（慈覺大師の事歴、百因緣集卷七の七と同文）、簫樊、韓彭、菹醢、禍敗、衛府、安和、北野、大公望、十九年經、李廣、蘇武（王昭君の事を詳述、後拾遺集の歌を引く）圖位、花山院。

四部合戰狀本の卷二は缺であるので貴重である。

卷三は、墨付五枚、

拜禮、朝覲、政務、學生、堂衆、流砂、葱嶺、佛生國、五臺山（法照禪師の事など百因緣集卷五の七に同文）、玉泉寺（緣起を述べる）、日吉山王（詳細、神道集卷三、高座天王事による）、花山法皇。

卷四は、墨付十四枚、

藤中納言、左京大夫、御魚味、穆王、孝殤皇帝、踐祚、六條院、准三后、法興院入道、東大寺、比叡山（傳教大師の傳記、百因緣集卷七の六に同文）、園城寺、前白河院、賀茂明神、應神天皇（詳細）、故紫路、諸衛、

院司、御餘波、後三條院、冷泉院、凶徒、百姓、河上建、天狗、頃年、國威、朝制、惠性天王、清涼山、八逆、關白殿、定位、田内、會稽、披國、玉川、玉花、金聖、金供、調達、貴寺、精舍、姑射山、諸宮、上聞、講砌、等坊、師論、異域、千金、萬吳、古武道、天平、弘仁、奥州甲舌、公卿、三公、糟糠、塵芥、奉咲、穀土半、白屋、青侍、帝序子、玉路、竹符、九州、符賀、納官、辨官、百司、令苦萬乘聖主、后犯、七孝、官丞、大相國、鬱均、光陰、親王、青鳥、芳志、清見原、鳥羽院、唐帝、守覺、中書、二條院。

卷五は、墨付十八枚、

中宮、一院、新院、攝政、公卿、殿上人、天神七代(詳細神道集卷一、神道由來事と關係があらう)、地神五代(詳細、同上)神武天皇、天王、豐葦原、畝傍、柏原、綏靖、安寧、懿德、孝照、大石河丸、孝靈、時成、崇神、大山、垂仁、景行、衣通姫、成務、武内、仲哀、神功皇后、應神、仁德、履中、眞鳥、反正、允恭、成方、安康、雄略、清寧、顯宗、仁賢、武烈、繼鉢、和文、宣化、山田左大臣、欽明、敏達、用明、崇峻、推古、舒明、皇極、孝德、大炊右大臣、齊明、石河少納言、天智、豐成左大臣、天武、大友王子、持統、文武、元明、人丸、元正(國分寺の事詳細)、聖武、孝謙、大炊、稱德、光仁、桓武、夷狄、殲繁、討親王、流關白、嵯峨、詣御友人、右中將、園城寺、圓惠、尊王堂、青龍院、都史多天、龍花下生、大宮、宰相入道、貞能、大庭三郎、北條、惠美、井上、氷上、早良、伊豫親王、仲成、逸勢、文屋、賴良、貞任、惡太府、太子丹、秦始皇、樊於期、武陽、磧樂、王淵、驪龍、弊邑、英雄、差圖、花陽、夏蕪萱、名東關、士率、北

關、羽林、文學、上西門院、仲綱、難陀、五穀、八幡大菩薩、八幡三所(詳細、箱根三所權現、神道集卷二の文によるか。伊豆權現)義明、一陰、一陽、鏡公應、率土、賞麻、厲味、禮符、微分、南面、改理、薄德、無萬民盛仁、萬鄉、誦樂、射山、孤嶋、幽境、瑞籬(詳細)、寶宮、季夏、初秋、萍桂、斗藪、白藏、玄冥、齋蕭、西莖、粉榆、闕雲、享煥、白業、淮南、人道、山中、謝喜、三公、正緣、忠度、震儀、荒佐氣、昧災、評諾、周文王、殷紂王、韓信、項羽、師公、二宮、木丸殿、幸親、大嘗會、東河、行幸、神服、神供、回立殿、清曙堂、邊鄙、叢祠、鳩巢、聖德、精舍、諫鼓、淳和、世務、漂人家、兆民、都城、邑洛、兩院、宇實、涼化、法聖、州津、白太、利公、越津、起王、賢談、魏王、觀王、迷池、公番、烏婆羅、明漢、公和、密陀、弗沙公、帝陀羅、筆點。

以上の内、傍線を付した語は特に注目すべき語で、この註解なくしては理解し難い本文である。例へば、四部合戰狀本に、

宇實王、傳教大師傳顯密二教、台州海原龍興寺、被亡涼化大臣、白樂天待小野篁被造望海樓、法坐天王亡之、賀茂保憲奉合早那起梨天子、習大仲臣經却夜殿、爲州津王被亡、漢陽宮爲項羽被滅、石季倫金谷園、白太王亡之、圓公角里全清被滅利公王季理、季皇居、爲越津被亡、四鶴心澄商山松戸、爲晋起王被亡、晋七賢恨濁世、閑籠竹林園、賢談王燒之、漢明帝白馬寺爲漢魏王被亡、唐太宗慈恩寺、爲魏觀王被亡、什公番經草堂寺、爲迷池大王被亡、法全和尚青龍寺、公番大臣亡之、道緯禪師玄忠寺、爲烏婆羅王被亡、善導和尚光明寺、爲明漢大臣被亡、懷盛法師千福寺、爲公和天文王被燒、小康法

師烏陵山、密陀羅王虎狩時被亡、念佛根本盧山、爲弗婆公被亡、禪窓幽閑寒山、爲帝陀羅王被亡、達摩和尚小林寺、筆點大臣燒之、道宣律師南山道場、爲君諦王被亡

とある。誤脱もあるが、これを打聞にみると、

宇實者周文王子、涼化者韓信子、法聖者梁武帝子、州津者魏勸帝子、白太者周伯丁王子、利公者德廣王子、越津者秦武陽子、起王幽谿王子、賢談者梁韓王子、魏王者武陽帝王子、觀王者魏平旦王子、迷池者秦始皇第三太子、公番者普那院王子、烏婆羅者西城王子、明漢魏太子上皇王、公和者小康大王子、密陀者漢高祖玄孫也、弗沙公者密陀長者子、帝陀羅者署君大臣子、筆點者誓陀羅長者子、君帝婆殊羅長者子云々。

とある。恐らく同一著者の記述するものではなからうか。

卷六は、墨付九枚、

朝拜、吉野玖封（詳細）、淵（醉）、禮儀、四代帝、清閑寺（行基菩薩の事詳細）、澄憲、法皇御歎、鄭仁基、陸氏、堯王、黃帝、舜王、八元、八愷、諒闇、勸盃、陰陽者七人、慈惠大師（詳細）、白河院、祇園女御、居色歌、孕女御、人長、亭子院、和泉大將、小松天皇、梟惡、狼戾、勸誘、反者、敗續者、崇德院、朱雀院、三條院、冷泉院、後三條院、法性寺殿。

卷七は、墨付九枚、

昴星、日域、朝廷、本主、累聖、明君、重祚、蒼生、緇素、權門、博陸、夷家、鎮西、利利、金輪、黃閣、十乘（詳細）、三密、朝憲、魚鱗、鶴翼、星旆、逆類、龍樓、幼稚、青宮、輔佐、相符、丞相、

四部合戰狀本と平家打聞

三台、九棘、堂上、男山（詳細）、強吳、暴秦衰（詳細で、秦始皇帝の事を述べる）

卷八は、墨付五枚、

菅丞相、宇佐宮（詳細、神道集卷一、宇佐八幡宮事による）、正八幡宮（同上）、大菩薩、前漢、隆玄、魏、蜀、七雄。

四部合戰狀本は卷八は缺である。

卷九は、墨付六枚、

天下、氷爲師、四方拜（詳細）、今女院、尙侍、義孝少將（詳細）。

卷十は、墨付五枚、

九禁、九州、親強、胡鳥、九朝、中都、花落、異家、當家、幼帝、后、外戚、外家、漢上、先者、配席、陳別、殷王、文王、迦葉尊者、雪山鳥、御賀、靈山淨土（詳細）、節下阿苦、源氏大將。

卷十一は、墨付二枚、

石清水、住吉、諏訪、龍、海底、洋津白波、珍重、帥内侍、内侍、普賢寺殿、北政所、天行、北友、七難（詳細）、重花、院方。

卷十二は、墨付三枚、

法勝寺、佛閣、皇居、文德天皇、朱雀院、握者、三台、參議、北野天神（詳細）。

以上で特に注目すべき所は詳細と述べた所である。

六

次に重要な點について若干述べれば、一つは神道關係の記事である。

卷三、日吉山王に就いて、

日吉山王者鎮護國家靈神、圓宗守護神道、遙奉尋其最初、大嶺頂修禪石上繫常樂我淨四德波羅蜜、彼時住彼峯、今傳教大師、一乘圓宗弘此山下、麓顯山王權現、廿一社上七社者、第一宮號大宮法宿權現、本地大恩報主釋迦如來……隔雲霞不知幾千年

とあり、神道集卷三、高座天王事と殆ど同文であり、卷五、天神七代、地神五代も神道集卷一、神道由來事と同一内容で、關係がありと認められ、卷八、宇佐宮に就いても、

宇佐宮者豊前國、人王三十代欽明天皇治天第十二辛未善記元年三十年、又大宮司補任帳云、僧聽三年、若余、廿九代宣化天皇治天第十三年壬午、宇佐由來記云、豊前國宇佐郡山谷邊、八頭老翁化來……三年仕、終奉顯其實跡……正八幡宮者……八幡者聞八正道、正見……入三有苦海、故號八幡大菩薩。

とある。これも神道集卷一、宇佐八幡宮事と殆ど同文である。卷五、箱根三所權現に就いては、同じく神道集卷二、二所權現事の中の一部と一致する語がある。(東洋文庫本刊本、七三頁)。以上によつて本書が、神道集によつたことは明白である。然し神道集の成立が安居院作とあり、本書の成立を明示することは出来ない。

次は佛教關係のもので、卷二、慈覺大師の條は、私聚百因緣集卷七の七と全く同文であり、卷三、五臺山の事も百因緣集卷五の七と同文であり、卷四、比叡山の條、傳教大師の事も百因緣集卷七の六と同文であり、本書が私聚百因緣集によつたことは疑ふ餘地がない。私聚百因緣集は、その序に愚勸住信の集述の由が見え、その跋文に、「時曆正

嘉元、丁巳七月中、於常陸集記」とあるによつて、正嘉元年(一二五七)七月成立であり、本書の成立も正嘉元年以後の成立となることは勿論である。

次には他の文獻との關係であるが、卷一、延喜帝を述べる條に、代繼大鏡卷二を引いて居り、北野天神の道眞の事に及び最後に、日藏上人の事を述べてゐる。卷二、王昭君の條に、後拾遺集卷十七、雜三の三首を引くが、

ヲモイキヤフルキミヤコヲタチハナレコノクニ人トナラヌ物トハ

(懷壽)

ミルカラニカミミノカゲノツラキカナカタ、ラザリセバナゲカザラマシ、(懷圓)

ナゲキコソ、ミチノ露ニモサリケレ、ナレニシサトヲコヘ、シナミダハ(赤染)

とあつて、傍點を付した所には誤りがある。同じ條に、顯昭の歌を引いて、

津ノ國ノナニハノツミノムクイキテ我ガ身ヒトツアシクカキケルとあり、又月詣集より、

心カラタマノクツトハカヘリケリ、ナニカヘシサノウラスセモセン

(惟宗廣言)

を引いてゐる。廣言の歌は月詣集雜下に、「王昭君の心をよめる」として、

心から玉ものくづとかくれにきなにかゑじまのうらみしもせん

とある。他に大鏡や六代勝事記の一節を引用してゐる。以上この平家打聞の存在によりて、四部合戦狀本の成立を元亨三四年頃のものとして大差ないものと推定したい。(四五・五・三〇)